



Title	ハンガリーにおける「東欧」経済史研究の諸問題 : 封建制から資本制生産へ
Author(s)	南塚, 信吾; Minamizuka, Shingo
Citation	スラヴ研究, 19, 139-175
Issue Date	1974
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/5042">https://hdl.handle.net/2115/5042</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000112987.pdf



# ハンガリーにおける「東欧」経済史研究の諸問題

—— 封建制から資本制生産へ ——

南 塚 信 吾

- I. ハンガリーにおける「東欧」経済史研究の展開
- II. 封建制の変質
  - a. 前期封建制
  - b. 後期封建制 — 西欧的發展からの乖離 —
- III. 封建制から資本制生産への移行 — ブルジョア的変革 —
- IV. 資本制生産の確立へ
  - a. 農業における資本主義
  - b. 未完の産業革命

## はじめに

本稿では、「東欧」史研究の概念を「東欧」に属する個々の民族国家の歴史の研究としてではなく、「東欧」諸国全体の歴史を、あるいは比較史的に、あるいは相互の有機的関係（国際関係）の視点から研究したものとして用いたい。

このような研究の必要性は、アウトサイダーとしての我々にも、次のような問題をたてて見るだけで、はっきりと認識できよう。「西欧と東欧の相違と類似性はどこにあるのか。東欧とソ連邦（ロシア）とのそれはどうか。バルカンと中東欧の發展傾向はそれぞれどのような特徴があるのか。東欧の個々の国のあいだの類似性と相違はどこにあるのか。」<sup>1)</sup>と。同時に東欧の個々の民族国家の歴史の研究は、個々の国の領土や人口のたび重なる激しい変化のためにも、我々には、きわめてむづかしく、かつまた、意味の限られたものに思えるのである。

そのような総合的な「東欧」史研究の必要性は、「東欧」のマルクス主義史家自身によっても、鋭く自覚されており、とくに戦後の1950年代末以来著しく強調されてきている。これは、当地における社会主義建設過程の実践的（経済的、政治的、民族的）諸問題に関係するとともに、「スターリン個人崇拜」期の「ドグマティズム」の否定と、東・西の史家のあいだの対話の回復にも鼓舞されているようである。

ところで、そのような総合的「東欧」史研究が、「東欧」の中ではハンガリーにおいて最も組織的に追求され、最も高い水準に達していることは、広く認められているところである。S. Z. ペヒの言うように、これは「東欧の一員でありながら、非スラヴ・グループとして、また、かつての『支配民族』として、ある程度まで局外者であるというハンガリ

1) Stanley Z. Pech, *New Avenues in Eastern European History*, "Canadian Slavic Papers," Vol. X, No. 1, 1968, p. 4.

一の特異な政治地理的位置の結果」<sup>2)</sup>なのであろう。

本稿は、主として、戦後のハンガリーにおける「東欧」経済史研究を通して、「東欧」史研究が「東欧」自体においていかに進められ、当地の研究者がいかなる問題に直面しているかを、多少とも明らかにしようとするものである。第一節では、戦後のハンガリーにおける两大戦間期までの「東欧」経済史の研究の展開が年代記的に概観され、「東欧」経済史研究の問題点や方法や「東欧」の概念の定義に注意が払われている。第二節から第四節まででは、封建制期から資本制生産の成立期（第一次世界大戦）までの「東欧」経済史の個々の重要な時期について、ハンガリー史学の史実上・理論上の成果が要約されている。<sup>3)</sup>（两大戦間期についての研究は、別に論ずる予定にしている。）

## I. ハンガリーにおける「東欧」経済史研究の展開

[1] 今日、ハンガリーにおいては、ハンガリー一国の経済史といえども、つねに「東欧」経済史との有機的關係の中で語られている。<sup>4)</sup> そのような段階にまで発展してきたハンガリーの「東欧」経済史研究の出発点は、やはり戦前の1930年代末から1940年代のハンガリーでの「東欧」史研究に求められる。その点を簡単に紹介して、本節の初めとしたい。

周知のとおり、一般に「東欧」史が「西欧」史と区別して語られ始めたのは、18世紀の末以来である。<sup>5)</sup> 以後久しく、「東欧」は「スラヴ世界」と同一視されつつ、第一次世界大戦以前においては、主にドイツの史家やスラヴォフィルによって、また、两大戦間においては、ドイツ、チェコ、ポーランドのブルジョア史家によって、文明史的に研究されてきた。これに対し、非スラヴ人としてのハンガリー人史家の「東欧」史への関心は著しく遅れて、1930年代末に現われたにすぎなかった。しかし、40年代に入るとハンガリー史学

2) Ibid., p. 4.

3) ハンガリー史学の東欧研究の動向は、*A magyar történettudomány válogatott bibliográfiája 1945-1968* (ハンガリー歴史学文献目録, 1945-1968年), Bp., 1970: E. Niederhauser, *Mađarská historiografia o historii Juhovýchodnej Európy* (ハンガリーにおける東南欧史研究文献解題), "Historicky Casopis," 1972, No. 2. からつかむことができる。また、東欧史研究そのもののヒストリオグラフィーは出ていない。このほか、1960, 1965, 1970年の国際歴史家大会にさいして出された出版物 *Etudes historiques publiées par la Commission Nationale des Hongrois*, 2 vols., Bp., 1960: *Nouvelles études historiques publiées à l'occasion du XII<sup>e</sup> Congrès International des Science Historiques par la Commission Nationale des Historiens Hongrois*, 2 vols., Bp., 1965: *Etudes historiques 1970 publiées à l'occasion du XIII<sup>e</sup> Congrès International des Science Historiques par la Commission Nationale des Historiens Hongrois*, 2 vols., Bp., 1970 (以下、本稿では、これらの書物の引用は、それぞれ次のように略称する: *Etudes historiques*, *Nouvelles études historiques*, *Etudes historiques 1970*) は、それぞれ第二巻に過去5カ年のヒストリオグラフィーをのせている。

4) 例えば、Berend T. Iván-Szuhay Miklós, *A tőkés gazdaság története Magyarországon 1848-1944* (ハンガリー資本主義経済史, 1848-1944年), Bp., 1973 は、広く東欧をながめつつ、ハンガリーを位置づけている。

5) 第二次世界大戦までのヨーロッパでの東欧研究、とくに「東欧」の概念については、次のものがよい。Perényi József, *L'Est européen dans une synthèse d'histoire universelle*, *Nouvelles études historiques*, Bp., 1965: Arató Endre, *Kelet-Európa története a 19. század első felében* (19世紀前半の東欧史), Bp., 1971, 7-15 1.

は「東欧」史研究への組織的な前進を始めた。ことに、1943年にはテレキ・パール歴史研究所がドナウ盆地の諸民族史の比較研究を専門とする機関誌を出し始めて世の注目を集めた。<sup>6)</sup> 戦時中および戦後も同研究所の活動と機関誌はテレキ・パール＝ドナウ研究所によって、ついで東欧史研究所によって引き継がれた。そして、40年代後半には、ハンガリーでは東欧の諸民族の歴史の「比較」と相互の「関係」の研究の面で先駆的な業績が生み出されたのであった。<sup>7)</sup>

だが、以上の諸活動はいずれもハンガリー中心主義 (magyar-centralizmus) を脱しておらず、1948年以後、社会主義体制が確立されるにつれ、「東欧」史研究は再組織されることとなった。1950年に東欧史研究所を継いで設立されたハンガリー科学アカデミー歴史研究所と1954年に設置されたブダペシュト大学人文科学部東欧学科が、新たに東欧史研究の拠点となった。また、これと平行して、従来のブルジョア的東欧史学のハンガリー中心主義の克服の努力が払われた。<sup>8)</sup> 東欧史研究は、東欧諸民族の歴史の「比較」と相互の「関係」という伝統的視点を、マルクス主義的に活用する方向で、再出発させられた。<sup>9)</sup> こうして、ハンガリーの東欧史学は50年代初めに国際的マルクス主義東欧史学と相互に刺激を与え合う体制を整えていった。

さて、東欧各国のマルクス主義史学において、「東欧」史研究が真剣な学問的関心を集め始めるのは「スターリン批判」以後であるが、すでに1950年代初めからその先駆的研究を指摘することができる。この時期のマルクス主義史学によって、初めて、東欧史研究は東欧経済史研究として発展させられることになる。この時期の研究の関心は、東欧諸国の資本主義的発展の出発点としての封建制農業の資本主義化に集中されていた。最大の焦点は、15～18世紀の東欧各国の土地制度史に当てられた。これは、周知のように、東欧諸国の「再版農奴制」の本質把握をめぐる国際的な論争へと発展するはずのものであった。この問題に関して、1952年にハンガリーのパホ・Zs・パール (Pach Zsigmond Pál) はハンガリーの16～18世紀の経済過程をイギリスの「囲い込み」に相当する資本の本源的蓄積の一形態と規定し、<sup>10)</sup> 1953年には東ドイツのJ・ニヒトヴァイス (J. Nichtweiss) も東ドイツの農業について「再版農奴制」を「プロシア的」資本主義発展の道への直接的移行の形態と規定し、<sup>11)</sup> ポーランドのA・ウィチャンスキー (A. Wyczański) も folwark 制を資

6) “Revue d’Histoire Comparée” は1943年から1948年までパリとブダペシュトで交互に出された。

7) *A Dunatáj. Történelmi, gazdasági és földrajzi adatok a Dunatáj államainak életéből* (ドナウ盆地 — ドナウ盆地諸国の生活の歴史・経済・地理的資料), Szerk. Radisich E., Bp., 1946; *Magyarország és Kelet-Európa. A Magyarország kapcsolatai a szomszéd népekkel* (ハンガリーと東欧 — ハンガリーの隣接諸民族との関係 — ), Szerk. Gál I., Bp., 1947.

8) “Századok”, 1953, 4 sz.: u. o., 1954, 1 sz. の誌上討論はこの点で貢献した。

9) Beszámoló a Magyar Tudományos Akadémia Történettudományi Intézetének munkájáról (ハンガリー科学アカデミー歴史研究所の活動の総括), “A Magyar Tudományos Akadémia Történettudományi Intézetének Értésítője,” 1956, 1-2 sz. はこの点を強調した。

10) Pach Zs. Pál, *Az eredeti tőkfelhalmozás Magyarországon* (ハンガリーにおける資本の本源的蓄積), Bp., 1952. この点について、パホは1955年にもロシア語で書いた。Об особенностях первоначального накопления капитала в Венгрии. «Вопросы Истории», 1955, № 4.

11) J. Nichtweiss, Zur Frage der zweiten Leibeigenschaft und des sogenannten preussischen Weges der Entwicklung des Kapitalismus in der Landwirtschaft Ostdeutschlands, “Zeitschrift für Geschichtswissenschaft,” 1953, H. 5.

本主義への移行の形態と規定した。<sup>12)</sup> この問題は、さしあたり、各国別に論争された。それは東ドイツでは J・クチンスキー (J. Kuczynski) によるニヒトヴァイス批判<sup>13)</sup> の形をとり、ポーランドでは歴史家大会での議論<sup>14)</sup> という形をとった。そこでは、「再版農奴制」を資本主義への移行の形態と見ることに異論がとなえられたのであった。しかし、まだ、この問題は国際的論争にまでは発展しなかった。それは 1956 年以後をまたねばならなかった。ただ、1954 年にチェコの J・ヴァールカ (J. Válka) が「再版農奴制」の本質把握をめぐる各国の議論を広く展望する論文<sup>15)</sup> を出していたのが注目されるのみである。

全体として、この時期のマルクス主義史学の議論の特徴は、先進資本主義国イギリスにおける封建制から資本制への移行のパターンが東欧にも適用されるとする傾向と、それに疑問を示す傾向とのあいだの対立であった。

これは、工業における資本主義的発展についても同様であった。しかしここでは「再版農奴制」のような東欧諸国に共通する本質的問題はなかったから、研究はより一国史的であった。強いて言えば、工業発展に最も複雑な条件を与えられていたハンガリーにおいて、やがて東欧的規模で問題となるべき論点が議論されていたと言いえよう。1953-54 年に、シャーンドル・ヴィルモシュ (Sándor Vilmos) は、ハンガリーの大工業の発達史において商人資本の食料品工業が重要な役割を演じたことを強調した。そして彼はこれを、「プロシア的」農業発展と 1848 年以後のハンガリーの対墾従属 (「共通関税」) の結果と見なした。<sup>16)</sup> この主張は、1956 年に、ハンガリーでもイギリスと同じ農村の繊維工業の発展の可能性があったが、1848 年以後の対墾従属のもとで挫折したと説くトルナイ・ジョルジュ (Tolnai György) の批判を受けた。<sup>17)</sup> ここに現われた農村の繊維工業か都市の食料品工業かという問題や、先進工業国への経済的従属をいかに見るかという問題は、やがて東欧全体の問題となるべき性格のものであった。前者は、イギリスのパターンの普遍性を説く方向と東欧の特殊性を説く方向の対立であったが、後者については、両方の方向の研究者が、この時期にはいずれも従属を強調していたことが注目される。

〔2〕 マルクス主義「東欧」史研究が新局面を迎えるのは、1956 年の「スターリン個人

12) A. Wyczański, O folwarku szlacheckim w Polsce XVI stulecia. Uwagi dyskusyjne, "Kwartalnik Historyczny," Vol. LXI, No. 4.

13) J. Kuczynski, Zum Aufsatz von Johannes Nichtweiss über die zweite Leibeigenschaft, "Zeitschrift für Geschichtswissenschaft," 1954, H. 3.

14) 1953 年に Otwock で folwark にかんするポーランド史家会議が開かれた。

15) J. Válka, K současnému stavu otázky "druhého nevolnictví" ve středoevropských zemích (Názory o vývoji feudálního pozemkového vlastnictví v 15-17. stol.) (中欧における「再版農奴制」の問題の最近の状態 — 15-17 世紀の封建的土地所有の発展にかんする見解 —), "Časopis Matice Moravské," 1954.

16) Sándor Vilmos, A magyarországi ipari kapitalizmus kezdeti kibontakozásának néhány kérdése 1849-1867 (ハンガリー産業資本主義発展の初期のいくつかの問題 — 1848-1867 年 —), "Századok," 1953, 2-3 sz.: u. o., Nagyipari fejlődés Magyarországon 1867-1900 (ハンガリーにおける大工業の発展, 1867-1900 年), Bp., 1954.

17) Tolnai György, A paraszti ipar kialakulása és tőkés iparra fejlődése Magyarországon 1842-1849 (ハンガリーにおける農村工業の形成とその資本主義的工業への発展, 1842-1849 年), "Századok," 1956, 4-6 sz..

崇拜」批判以後であり、それが硬直的でドグマティックな理論の克服を可能にする一方、社会主義革命および社会主義建設の道の多様性を承認して、東欧史を特殊性の中に把握する方向を促進してからであった。

この時期の研究の関心は、引き続き、封建制から資本制への移行期にあり、とくに農業の資本主義化に集中していた。だが、この時期の研究は、前期とは違って明白に、東欧全体についての議論となり、また、明白に東欧の特殊性を強調していた。前期の東欧諸国の「再版農奴制」にかんする議論は、1956年にポーランドのB・ジエンタラ(B. Zientara)の論文<sup>18)</sup>によって、国際的性格を与えられた。それは「中欧」における「再版農奴制」の本質を、ニヒトヴァイスやパホやヴィチャンスキーの言うような資本主義への移行としてではなく、封建的な逆行＝農奴制の強化として、また、西欧的發展からの東欧の乖離として、規定した。彼によれば、資本主義への移行が言えるのは、東欧では18世紀からであった。また、「再版農奴制」の成立については、彼は、国内市場と都市の発展の弱さによる階級関係の封建性その原因であるとし、その後の穀物輸出の発展がこの封建的逆行を助けて、商品経済および国内工業の発展を妨げたとした。この「再版農奴制」の成立史と展開については、同じく1956年に、ポーランドのW・ルシンスキー(W. Rusiński)が論文を著わし<sup>19)</sup> 東欧における「再版農奴制」の成立の原因は国外市場の拡大(ただし、ロシアでは国内市場の拡大が要因とされた)と領主の農民支配力の強さにあるとし、また「再版農奴制」は17～18世紀には技術発展をおくらせて西欧にたいする東欧のおくれを決定的にしたと述べた。東欧における「再版農奴制」の研究のこのような傾向は、1958年にはソヴェト史学の参加によって、いっそう促進された。同年、ソヴェトのC・D・スカスキ(C. Д. Сказкин)は、「中・東欧(Средняя и Восточная Европа)」における「再版農奴制」について、ジエンタラ論文に全面的に賛成する論文を発表し<sup>20)</sup> その経済的本質を封建制の再強化であるとした。また、その成立の原因は、ロシアにおいても国外市場の拡大に求められるとして、B・D・グレコフがそれを国内市場に求めた<sup>21)</sup> ことを批判した。ただし、彼は、「再版農奴制」が封建制の強化であるにしても、そのもとでの資本主義の萌芽の成長を分析することをも同時に強調した。その点は、翌年に彼がA・H・チストズヴォノフ(A. Н. Чистозвонов)と共に発表した資本主義の起源についての論文<sup>22)</sup> でくり返された。また、同年のB・M・ラヴロフスキー(B. М. Лавровский)の論文<sup>23)</sup> は、資本の本源的蓄積の観点から上の問題に貢献した。さらにチェコにおいても「再

18) B. Zientara, Z zagadnień spornych tzw. "wtórnego poddaństwa" w Europie Środkowej "Przegląd Historyczny," 1956, No. 1.

19) W. Rusiński, Drogi rozwoju folwarku pańszczyźnianego "Przegląd Historyczny," 1956, No. 6.

20) C. Д. Сказкин, Основные проблемы так называемого „второго издания крепостничества" в средней и восточной Европе, «Вопросы Истории», 1958, № 2.

21) B. Д. Греков, «Крестьяне на Руси», Москва, 1947.

22) C. Д. Сказкин-А. Н. Чистозвонов, Задачи изучения проблемы генезиса капитализма, «Вопросы Истории», 1959, № 6.

23) В. М. Лавровский, Некоторые спорные вопросы первоначального накопления, «Вопросы Истории», 1959, № 8.

版農奴制」を封建的反動とする研究が現われた。<sup>24)</sup>

以上の研究を通じて、「再版農奴制」の見られたエルベ河以東のヨーロッパ部分を「中・東欧」とし、そこからロシアを除いた部分を「中欧」とする定義が普及した。そして、「再版農奴制」の成立がこれらの地域の発展を西欧に比べて特殊なものにしたと論じられたのであった。だが、ここでは、トルコ支配下にあったバルカンは異質なものとされ、議論の外に置かれていた。

この間ソ連邦科学アカデミーは1958年に「東欧(Восточная Европа)」の土地制度史にかんする第一回シンポジウムを開いた。これはそれ以後ソ連邦内の東欧諸共和国の農業を中心としつつ毎年開かれたが、東欧の人民民主主義諸国からも代表が招かれて、東欧諸国に土地制度史研究の刺激を与えた。とくに、ここではバルカン諸国も対象に入っていた。<sup>25)</sup>

この間、ハンガリーの「東欧」史学は、「スターリン批判」以後(むしろハンガリー事件の收拾以後)再び組織的な盛り上りを見せ、同じく土地制度史の面で積極的な成果を発表し始めた。しかし、ハンガリーでは直接に東欧の「再版農奴制」の研究は手がけられず、むしろより新しい時期から手がけられ、迂回しつつ上の問題にかんする諸外国の研究に合流する形をとった。すなわち、1958年に、パホ・Zs・パールが、19世紀後半のハンガリーとロシアの農業における「プロシヤ的」発展の道を比較する精緻な論文を発表し、<sup>26)</sup> ニーダーハウザー・エミール(Niederhauser Emil)がバルカンを除く「東欧(Kelet Európa)」全体における農奴解放と民族問題の相互関係にかんする論文を発表<sup>27)</sup>して、東欧の農業のブルジョア的発展期の解明に貢献した。いずれも、50年代中頃からのハンガリー史学の比較土地制度史研究の成果を物語るものであった。

だが、より画期的なのは、同じく1958年にニーダーハウザーによって発表された『東欧の発展の問題によせて』と題するエッセー<sup>28)</sup>であった。それは、詳細な考証を省いて、東欧史の全体を封建制の成立期から現代に至るまで、社会の経済的「土台」と「上部構造」の双方を考慮しつつマルクス主義的観点から総合的に概観したものであった。それは、民族問題と経済発展の問題を二つの主要な視角としつつ、東欧史全体を次のように区分した。(a) 東欧諸民族の移住と定着期(6~10世紀)、(b) 前期封建制期(11~15世紀)、(c)

24) J. Válka, Druhé nevolnictvi a puvodeni akumuláče v XVI. století, "Ceskoslovensky Casopis Historicky," 1958. その他、ポーランドでも次の論文が出た。M. Małowist, Z zagadnień popytu na produkty krajów nadbałtyckich w Europie Zachodniej w XVI wieku, "Przegląd Historyczny," 1959, No., 4.

25) この議事録は1964年まで出ている。「Ежегодник по аграрной истории Восточной Европы, 1958», Таллин, 1959, 以下, 1959年版はモスクワで1961年に, 1960年版はキエフで1962年に, 1961年版はリガで1963年に, 1962年版はミンスクで1964年に, 1963年版はヴィルノで1965年に, 1964年版はキンニョフで1966年に出た。その後は、「Вопросы Истории」に紹介がある。

26) Pach Zs. P., Az oroszországi és magyarországi poroszutas agrárfejlődés egyező és elterő vonásairól a XIX. század második felében (19世紀後半のロシアとハンガリーにおけるプロシヤ的農業発展の道の類似性と相違), "Közgazdasági Szemle," 1958, 1 sz.. これより内容がくわしいが、同じタイトルのロシア語版が、「Из истории рабочего класса и революционного движения», Москва, 1958にある。

27) Niederhauser Emil, A jobbágyfelszabadítás és a nemzetiségi kérdés Kelet-Európában (東欧における農奴解放と民族問題), "Történelmi Szemle," 1958, 1-2 sz..

28) E. Niederhauser, Zur Frage der osteuropäischen Entwicklung, "Studia Slavica", 1958, Vol. 4.

多民族国家の成立と後期封建制期——西欧的発展からの乖離期——(16～18世紀), (d) 封建制から資本制への移行と民族主義の発生期 (19世紀前半), (e) 資本主義および民族主義の発展期 (19世紀半ば～ロシア革命), (f) ファシズム期 (両大戦間), (g) 社会主義期。

また、「東欧」の地理的範囲については、それは、エルベ河以東ウラル山脈および黒海までとし、その中にバルカン諸国をも含めた。そして、全体として、16世紀以来の西欧からの東欧の乖離、東欧内部でのバルカンとその他地域の相違が、社会主義のもとで止揚されることを展望していた。このエッセーは、50年代中頃からのハンガリー史学の「東欧」研究の累積の産物であったとすることができる。

このエッセーは、1959年に、ハンガリー科学アカデミー歴史研究所の「東欧」諸国の発展（とくに封建制期の発展）の特殊性にかんするシンポジウムを引き起こした。<sup>29)</sup> ここでハンガリー史学は、東欧の「再版農奴制」の本質を封建制の再強化とし、東欧史の発展の特殊性の出発点を「再版農奴制」の成立に求める諸外国の東欧土地制度史研究に合流し、とくにその成立の原因と過程の解明に注意を集中した。シンポジウムではその原因が国外市場の拡大（東・西欧間の農・工業分業）にあることでは一致があったが、さらにそれがいかに生じたかをめぐって論議がたたかわされた。また、この農業発展との関係で、バルカンを「東欧」に含めるには一定の留保が必要であることが強調されたが、しかし、全体として、その後のハンガリーの東欧史学がバルカンを含めた「東欧」の発展の問題に取り組むことを妨げるものではなかった。

以上のような50年代末の各国の東欧土地制度史研究の高まりを反映して、1960年の第11回国際歴史家大会の経済史会議では15～18世紀の東欧の農業発展が議論された。<sup>30)</sup> 論点の一つは、「中・東欧」における「再版農奴制」の成立の原因に関連して、16～17世紀に領主制商品生産を導いたのは、すべての国において国外市場の拡大であったのかという点であり、とくにロシアについて、国内市場の拡大を重視するルンンスキーのスカスキンの批判という形をとった。第二の点は、「再版農奴制」の経済的内容に関係していた。16～18世紀の「中欧」における封建制から資本制への移行を扱ったチェコのA・クリーマ(A. Kíma)とJ・マツレク(J. Macúrek)の共同報告は、ニヒトヴァイスらとは別の意味で、工業面から接近しつつ、すでに16世紀からの資本主義への移行を論じた。これに対して、かつての自説を訂正したパホ・Zs・パールは、資本主義への移行が言えるのは18世紀末からであり、それまではこの移行への前提について語るにすぎないと批判した。言うまでもなく、諸議論の基本方向は東欧の発展の特殊性の強調にあった。その点からして、ソヴェトのB・A・ゴロボウツキー(B. A. Головоуцкий)は西欧と東欧の資本主義の比較史的研究の促進の必要を強調した。

29) このシンポジウムの封建制期にかんする部分は、直ちに発表された。A kelet-európai országok feudalizmus kori fejlődésének sajátosságairól. Vita a Történettudományi Intézetben (東欧諸国の封建制期の発展の特殊性について — 歴史研究所における討論 —), “Történelmi Szemle,” 1959, 3-4 sz..

30) *XI<sup>e</sup> Congrès International des Sciences Historiques*, Stockholm, 1960: A XI. Nemzetközi Történeztudományi Kongresszus (第11回国際歴史家大会), “Századok,” 1960, 5-6 sz.: Pach Zs. P., A XV-XVIII. századi agrárfejlődés egyes kérdései a stockholmi történeztudományi kongresszuson (ストックホルム歴史家大会における15-18世紀農業発展のいくつかの問題点), “Századok,” 1961, 2-3 sz..

他方、東欧の産業革命についても、「スターリン個人崇拜」批判以後、東欧の特殊性を究明しようとする傾向が広まった。1956年にJ・クチンスキーは、イギリスの古典的産業革命と比べてのドイツ、ロシアその他の東欧の産業革命の特殊性を扱った論文を発表した<sup>31)</sup>がそのさい彼はイギリスの産業革命の諸指標（とくに綿工業の主導性）を直接的に適用し、東欧のその著しい時期的遅れ（「帝国主義時代の産業革命」）を指摘し、それを「プロシヤ的」産業革命の特質と規定した。同論文をめぐって1956年秋に開かれたドイツ科学アカデミーでのドイツ、ポーランド、チェコ史家の国際シンポジウムでは、チェコのJ・ブルシュ（J. Purš）とポーランドのW・クラ（Kula）が、クチンスキーの見解を批判した。論点はクチンスキーがイギリスのモデルを機械的に適用することによって、東欧の特殊性を見ているということであった。ブルシュは、あらゆる産業革命を綿工業の視点から見ることは正しくないとし、<sup>32)</sup>クラは、大規模領主農業の支配と西欧での産業革命の先行とが東欧の産業革命に与える意義を見なければならぬと論じた。<sup>33)</sup>さらに、1958年には、ソヴェトのB・K・ヤツンスキー（B. K. Яцунский）は、東欧の産業革命は資本の本源的蓄積の低さや封建的農業の広汎な残存に影響されてイギリスとは違った形をとったとした。<sup>34)</sup>しかし、全体として、これらの批判も、東欧の産業革命がイギリスのそれといくらかの形態上の相違をもって生じたことを論じたにすぎず、イギリスのそれと質的に違ったものとして論じたのではなかった。その点では、クチンスキーの見解のほうがより根本的な示唆を含んでいた。この問題が質的相違として追求されるのは、60年代末に現われるハンガリー史学の新しい研究に待たねばならなかった。

〔3〕50年代後半に、東欧各国のマルクス主義史学によって、東欧経済史をその特殊性の観点から研究する必要性が認識されたとすれば、60年代にはより具体的実証的な東欧経済史の構成が進められた。これは、数次の国際歴史家大会と国際経済史学会<sup>35)</sup>によって、また、各国における東欧関係研究所の設立<sup>36)</sup>によって鼓舞された。

まず、ハンガリー以外の東欧諸国の東欧経済史研究の60年代の成果に簡単に触れておこう。チェコでは、A・クリーマが、1960年に「中欧」の工業の封建制から資本制への移

31) J. Kuczynski, Zum Problem der industriellen Revolution, "Zeitschrift für Geschichtswissenschaft," 1956, H. 3.

32) J. Purš, Problems of the Industrial Revolution, "Kwartalnik Historii Kultury Materialnej, Ergon," 1958, No. 1.

33) W. Kula, Some Observations on the Industrial Revolution in Eastern European Countries, Ibid., 1958, No. 1.

34) B. K. Яцунский, К вопросу о проблематике и методике изучения истории промышленного переворота в странах Восточной Европы, Там же., 1958, №. 1.

35) 国際歴史家大会は、第12回が1965年にウィーンで、第13回が1970年にモスクワで開かれた。新設の国際経済史学会は第1回が1960年にストックホルム、第2回が1962年にアイクス、第3回が1963年にミュンヘン、第4回が1967年にブルーニングトン、第5回が1970年にレニングラードで開かれた。

36) 1962年にポーランド科学アカデミー歴史研究所にソ連・中欧部門、1963年にルーマニアに東南欧研究所、ブルガリアにバルカン研究所、1964年にチェコにヨーロッパ社会主義国研究所（ブラハトブラチスラヴァ）が設立された。

行について、また 1962 年には「中欧」の資本制への移行期の家内工業と問屋制工業についての研究を発表し、<sup>37)</sup> 17 世紀からの工業における資本主義の発展を論じ続けた。だが、その後のチェコでは、「東欧」研究はむしろ「スラヴ」研究として発展させられてきており、その中で、戦前、戦後の「東欧」概念の再検討などが行なわれている。<sup>38)</sup>

ポーランドについては、J・トポルスキ (J. Topolski) の研究を挙げなければならない。彼は、1965 年に 14~17 世紀のヨーロッパ (東欧を含む) における資本主義の発生について、1967 年には 16~18 世紀の「中・東欧」の農業変革についての研究を発表し、1970 年には国際経済史学会で 16~18 世紀の「中・東欧」における領主経営の「再封建化」の過程にかんする研究を報告した。<sup>39)</sup> ハンガリーのパホと共に、東欧の「再版農奴制」の成立と展開の研究を最も忍耐強く続けている彼は、とくに 16 世紀の領主経営の財政的危機という観点から「再版農奴制」の成立に近づいた。

ソ連では、1958~59 年の東欧経済史研究の盛り上りが退潮したのち、東欧農業史のシンポジウムが続いているほかは、1965 年に Я・С・グロスル (Я. С. Гросул) らが「東南欧」(ワラキア、モルダヴィアなど) における封建制から資本制への移行にかんする非マルクス主義史学の研究を批判する論文を発表した<sup>40)</sup> にとどまっている。

他面、ブルガリアでは、N・トドロフ (N. Todorov) がオトマン・トルコ帝国下のバルカン全域にわたる経済史上の問題について、次々と研究を発表し始め、同地域における封建制から資本制への移行の問題や、15~17 世紀の都市および工業の発展や、19 世紀の資本主義の発展について、興味深い成果を示している。<sup>41)</sup>

ハンガリー以外の東欧諸国の東欧経済史研究が概して散発的であるのに比し、ハンガリーのそれは 60 年代に組織だった着実な前進を見せ、方法論的にも発展を示した。この前進は、同じく 60 年代に精力的に進められたオーストリア=ハンガリー二重王国史の研

37) A. Klíma, Zur Frage des Übergangs vom Feudalismus zum Kapitalismus in den Industrieproduktion in Mitteleuropa, *Probleme der Ökonomie und Politik in der Beziehungen zwischen Ost- und Westeuropa vom 17. Jahrhundert bis zur Gegenwart*, Berlin, 1960: The Domestic Industry and the Putting-out System (Verlags-system) in the Period of Transition from Feudalism to Capitalism, *Second International Conference of Economic History*, Stockholm, 1962.

38) Lásd., Arató E., *Kelet-Európa története...*, 483 l.: "Világtörténet," 21 sz., 147-157 l..

39) J. Topolski, *Narodziny kapitalizmu w Europie XIV-XVII. wieku*, Warszawa, 1965: Les tendances de l'évolution agraire de l'Europe Centrale et Orientale aux XVI-XVIII siècles, "Rivista di Storia dell'Agricoltura," 1967, No. 2: A nagybirtok gazdaságának refeudalizálódása Közép-és Kelet-Európában. (XVI-XVIII. sz.) (中東欧における領主経営の再封建化 — 16-18 世紀 — ), "Világtörténet," 1970, 20 sz..

40) Я. С. Гросул-Н. А. Мохов-П. В. Советов, Особенности перехода от феодализма к капитализму на юго-востоке Европы. «Вопросы Истории», 1965, № 11.

41) N. Todorov, Sur quelques aspects du passage du féodalisme au capitalisme dans les territoires balkaniques de L'Empire Ottoman, "Revue des Études Sud-Est Européennes," 1963, No. 1-2: Первая государственная текстильная фабрика на Балканах, «Генезис капитализма в промышленности», Москва, 1963: Некоторые вопросы статута и облика балканского города XVI-XVII вв., «Труды XXV Международного Конгресса Востоковедов (Москва, 9-16, VIII, 1960)», Москва, 1963: The Balkan Town in the Second Half of the 19th Century, "Etudes Balkaniques," 1969, No. 2.

究<sup>39)</sup>とも密接な関係を持っていたほか、とくに1965年や1970年の国際歴史家大会および1967年や1970年の国際経済史学会<sup>43)</sup>が刺激となっていた。

ハンガリーの東欧経済史研究にかんして言えば、1967年前後が一つの画期となっている。1967年以前は50年代から続けられてきた東欧の近代土地制度史の比較(összehasonlítás)研究が著しく深められる時期である。

まず、封建制期の東欧農業史について見ると、最も注目されるのが、パホ・Zs・パールの「再版農奴制」の研究である。彼は、50年代以来の東欧各国での研究成果をふまえつつ、また、数年にわたる自らの比較農業史研究の成果に基づいて、1963年に『15～17世紀における西欧とハンガリーの農業発展』<sup>44)</sup>を著わした。これにより、彼は、ハンガリーおよび東欧諸国の農業発展が西欧のそれから乖離していく過程を解明し、東欧の封建制から資本制への移行期における「再版農奴制」の歴史的位を明らかにした。それは、国際分業の拡大によってもたらされた16世紀の商品経済の発展の中で封建領主の商品生産が台頭してきたこと、また、こうして確立された領主経営の本質は封建的反動であり、17世紀中頃以後の東欧の国際分業からの孤立の中で、商品生産・資本制生産の発展を妨げたことを論じた。そして16～17世紀は「プロシア的」資本主義への移行期ではなくて、その移行への前史であると規定された。これは1952年の自説の批判でもあるとともに、クリーマらの見解の批判でもあった。

その他、封建制期の東欧史に関するものとしては、初期封建制の基礎的な解明に貢献したバルタ・アンタル(Bartha Anthal)の研究<sup>45)</sup>、封建制期の国家組織(中央集権化)を扱ったエレケシュ・ラヨシュ(Elekes Lajos)の研究<sup>46)</sup>、絶対主義の社会・経済的基盤を扱

42) オーストリア＝ハンガリー二重王国史のハンガリーでの研究の主なものは、*Studien zur Geschichte der Österreichisch-Ungarischen Monarchie*, Szerk. Sándor V. -Hanák P., Bp., 1961: Az osztrák-magyar Monarchia történeti problémái. 1900-1918 (オーストリア＝ハンガリー二重王国の歴史の諸問題 1900-1918年), “Századok,” 1965, 1-2 sz.: Recent Hungarian Literature on the History of the Austro-Hungarian Monarchy 1848-1918. A Historiographical Survey, “Austrian History Yearbook,” 1965, Vol. 1: *Die Agrarfrage in der Österreichisch-Ungarischen Monarchie 1900-1918*, Bukarest, 1965: *Die Frage des Finanzkapitals in der Österreichisch-Ungarischen Monarchie*, Bukarest, 1965: *Die nationale Frage in der Österreichisch-Ungarischen Monarchie 1900-1918*, Bp., 1966: Hanák P., Magyarország az Osztrák-Magyar Monarchiában. Tűlsúly vagy függőség? (オーストリア＝ハンガリー二重王国におけるハンガリー — 優越か従属か —), “Századok,” 1971, 5 sz. (この英語版は, “Austrian History Yearbook,” 1967にある)。

43) これらの会議でのハンガリー史家の活躍は, A XII. Nemzetközi Történelem-kongresszus (第12回国際歴史家大会), “Századok,” 1966, 1 sz.: A XIII. Nemzetközi Történettudományi kongresszus (第13回国際歴史学会), “Századok,” 1971, 2 sz.: Pach Zs. P., A III. Nemzetközi Gazdaságtörténeti Kongresszusról (第3回国際経済史学会について), “Századok,” 1966, 1 sz.: Pach Zs. P., A IV. Nemzetközi Gazdaságtörténeti Kongresszus (第4回国際経済史学会), “Századok,” 1969, 1 sz.: Berend T. Iván, Az V. Nemzetközi Gazdaságtörténeti Kongresszus és tanulságai (Leningrád 1970 augusztus) (第5回国際経済史学会とその教訓 — レニングラード, 1970年8月 —), “Századok,” 1971, 2 sz..

44) Pach Zs. P., *Nyugat-európai és magyarországi agrárfejlődés a XV-XVII. században*, Bp., 1963.

45) Bartha A., A kelet-európai és belső-ázsiai feudalizmus történeti kapcsolatai (東欧と内アジアの封建制の歴史的関係), “Századok,” 1963, 2 sz.: *Восточная Европа и раннее средневековье Венгрии до середины XI века*, *Nouvelles études historiques*, Bp., 1965.

46) Elekes L., *Rendiség és központosítás a feudális államokban* (封建諸国家における領主制と中央集権化), Bp., 1962.

ったモルナール・エリック(Molnár Erik)の研究<sup>47)</sup>などが挙げられる。

次に、東欧の資本主義への移行期の農業変革については、ニーダーハウザーの一連の研究<sup>48)</sup>が出色である。1958年の東欧の農奴解放と民族問題の研究に続いて、1961年に農奴解放後の地主経済と農民経済の資本主義化の研究を発表した彼は、1962年に『東欧における農奴解放』を著わした。これは「東欧」のうち「再版農奴制」が成立した地域——すなわち、プロシア（プロシア領ポーランドを含む）、オーストリア（ボヘミア、ハンガリー、ガリチアを含む）、ロシア（ポーランド王国を含む）そしてルーマニア——の農奴解放の過程（19世紀初から60年代にいたる）を比較史的に研究したものであった。この研究は、これら地域とバルカンとの農業発展の相違はもとより、これら地域内でのその相違をも明らかにした。さらに、1965年には、彼は、国際歴史家大会に際して、バルカンをも含む東欧諸国の19世紀のブルジョア変革の前史・過程・結果を広く展望した包括的な論文を発表した。また、同年には、彼はヨーロッパの19世紀後半から20世紀初めにかけての農民経済の資本主義化の比較研究をも発表した。

第一次大戦後の東欧の土地制度史については、ドルマーニョシュ・イシュトヴァーン(Dolmányos István)の两大戦間(1917~1939年)の東欧諸国の土地改革の研究<sup>49)</sup>が注目されねばならない。これは、1962年から1965年まで継続的に発表されたもので、バルト諸国、ポーランド、チェコスロヴァキア、ルーマニア、ハンガリー、ユーゴスラヴィア、ブルガリア等の土地改革過程を比較分析したものであった。それは、東欧各国のこの時期の土地改革は19世紀の農奴解放をよりブルジョア的に進めたものではあったが、封建遺制を一掃することはできず、むしろ革命をそらせる上で意味が大きかったとした。

東欧の工業発展については、この時期にはとくに重要な研究は現われず、強いて挙げれば、1965年の第三回国際経済史学会でのベレンド・ティボール・イヴァーン(Berend Tibor Iván)とラーンキ・ジョルジュ(Ránki György)の東欧における工業と労働者階級の発展の諸特徴にかんする報告<sup>50)</sup>を指摘しうるにとどまる。

その他、この時期のハンガリー東欧史学の産物としては、ロシアの二月革命の東欧への影響や第一次世界大戦後の東欧の民族問題の国際的解決にかんする小論<sup>51)</sup>などが挙げえ

47) E. Molnár, Les fondements économiques et sociaux de l'absolutisme, *Nouvelles études historiques*, Bp., 1965.

48) Niederhauser E., A nagybirtok és a parasztság Kelet-Európában a polgári forradalmak után (東欧におけるブルジョア革命後の地主と農民), "Acta Universitatis Debreceniensis de Ludovico Kossuth Nominatae," 1961: *A jobbágyfelszabadítás a Kelet-Európában*, Bp., 1962: The Problems of Bourgeois Transformation in Eastern and South Eastern Europe, *Nouvelles études historiques*, Bp., 1965: A parasztság Európában (ヨーロッパの農民階級), *A parasztság Magyarországon a kapitalizmus korában*, II., Bp., 1965: Классовая борьба крестьянства в Восточной Европе во второй половине XIX-начале XXв.), "Acta Universitatis Debreceniensis de Ludovico Kossuth Nominatae," 1965.

49) Dolmányos I., A kelet-európai földreformok néhány problémája 1917-1939 (東欧の土地改革のいくつかの問題 — 1917-1939年 —), "Agrártörténeti Szemle," 1962, 1-2 sz. — 1965, 2-3 sz..

50) I. T. Berend-Gy. Ránki, Peculiarities of Industrial Progress in Eastern Europe and the Development of the Working Class, *Third International Conference of Economic History*, Paris, 1968.

51) Merényi L., Az 1917. februári orosz forradalom és Kelet-Európa (1917年2月ロシア革命と東欧), "Történelem," 1967, 7 sz.: L. Kővágb, Попытка интернационального решения национальных проблем Юго-Восточной Европе в 1919 году), *Nouvelles études historiques*, Bp., 1965.

よう。

他方、1967年頃までのハンガリー東欧史学のもう一つの特徴は、この時期に「東欧」史研究の方法や概念の整理が進められたことである。言うまでもなく、この作業は実証的な東欧経済史（とくに土地制度史）の研究に裏づけられつつ進められたのであった。

1965年のブルジョア変革にかんするニーダーハウザー論文は、「東欧」概念をより詳しく、「狭い意味での東欧 (Eastern Europe proper)」と「東南欧 (South-Eastern Europe) (バルカン)」とに区別した。<sup>52)</sup> その定義によれば、前者は、エルベ河以東のドイツ、ハプスブルク帝国、ポーランド王国を含むヨーロッパ・ロシアから成り、「再版農奴制」の成立を見、ブルジョア変革後に農業の資本主義的発展が「プロシア的道」を進んだところであり（これはハンガリー以外の東欧諸国の文献では「中・東欧」と呼ばれている）、後者は、トルコの封建制が植えこまれ、トルコからの解放後の変革により小農民的土地所有がもたらされたところであった。このような「東欧」概念は50年代以来の近代土地制度史の比較研究の論理的帰結とも言えるものであった。

同じく1965年に、ペレーニイ・ヨージェフ (Perényi József) は、世界史的総合の中で「東欧」史をいかに把握するかという視角から、東欧史研究に方法論的に貢献する論文を書いた。<sup>53)</sup> 彼は、個々の民族史の機械的寄せ集めとしての「東欧」史を排除し、「東欧」史を一つの有機的の一体として、また、世界史の不可分の一要素として、構成すべきことを説いた。とくに彼は、全ヨーロッパ的の一体性と「東欧」の一体性とが、時代的にいかに変化したかを検討し、15世紀以来の「再版農奴制」の成立やトルコ支配の強化による「東欧」独自の発展方向の決定、19世紀の資本主義期における全ヨーロッパ的の一体性の再現、ロシア革命によるソヴェト体制の成立の意義、第二次大戦後の社会主義的に統合された「東欧」と「西欧」との一体性の問題を論じた。このような東欧史の段階的把握は、当然、「東欧」の枠の時代的变化を強調した。とくにそれは、ニーダーハウザーのような近代の土地制度史から導かれた「東欧」概念に対して、社会主義ロシアの成立を考慮に入れる必要を訴えた。概して、この論文は、1958年のニーダーハウザーのエッセーに対比すべき性格のものであるが、その後のハンガリー東欧史学の成果を基礎に、より進んだ地点に立っていたと言える。

1967年に書かれたホナーク・ペーテル (Hanák Peter) の研究史『最近のハンガリー史学における東欧史の諸問題』<sup>54)</sup> は、自らの東欧史研究へのハンガリー史学の自信を表わしていた。これは、それまでのハンガリーの東欧史学の成果を封建制期から第一次世界大戦までの時期について整理し問題点を指摘したものであり、全体として、東欧史の西欧史的発展への類似性ではなく、東欧史の発展の特殊性をハンガリー史学が究明しつつあることを示した。それは、「東欧」の枠組については、それまでのハンガリーでの議論、とくにニーダーハウザーとペレーニイの意見を基礎にして、次のように要約した。

52) E. Niederhauser, *The Problems of Bourgeois Transformation*, p. 565-566.

53) J. Perényi, *L'Est européen dans une synthèse histoire universelle, Nouvelles études historiques*, Bp., 1965.

54) P. Hanák, *Problems of East European History in Recent Hungarian Historiography*, "East European Quarterly," 1967, No. 1.

- a. 東欧はエルベ河以東ウラル山脈にいたるユーラシア大陸部分であり、大体において地理的に類似しており、その気候は農業に適している。
- b. この地域の人種的構成は西欧よりも遅く 6~12 世紀の民族移動の間に決定された。ここではスラヴ人が支配的であるが、スラヴ人自身が相互に著しく異なっているうえに、その間にハンガリー人やルーマニア人やその他のトルコ系人種が混在して、多民族的性格が特徴となっている。
- c. 歴史的に見て、東欧の枠はつねに変化し、その中に多くの小区分が現われている。一般的に言って、三つの重要な区分が可能である。一つはロシア、一つはバルカン、一つはエルベ河からカルパティア山脈までの「中部東欧」である（それぞれ North-Eastern Europe, South-Eastern Europe, Central-Eastern Europe とすることもできる——筆者）。

ここに、ニーダーハウザーの言う「狭い意味の東欧」（ハンガリー以外の東欧諸国の文献の「中・東欧」）は、ロシアと「中部東欧」（これはハンガリー以外の東欧諸国の文献では「中欧」に当たる）に分けられたのである。が、1967 年までのハンガリー東欧史学はいまだこの分類に実質的内容を与えてはいなかった。

1966, 1967 年に、それぞれペレーニとニーダーハウザーは、それまでの東欧史研究の成果に基づき、国民大衆向けの啓蒙的エッセーを書いた。<sup>55)</sup>

1967 年頃をもって、ハンガリー東欧史学は発展の第一段階を終えたと見ることができる。

[4] 1967 年から 1970 年代初めにかけて、ハンガリー東欧史学はその範囲を急速に拡大し、ダイナミックな上昇をとげた。この時期の特徴は、東欧の工業の資本主義的発展の研究、農・工業の資本主義的発展の総合的研究、そして東欧の資本主義的発展全体の新しい視角の確立であった。

農業における資本主義的発展の研究に代わって工業のそれが始められたのは、一つには土地制度史研究が一定の成果をあげ、東欧の社会・経済的発展の理解のためには、さらに工業における資本主義的発展の諸特徴が把握される必要が生じてきたからである。しかし、むしろ、ハンガリー史学において、ハンガリー工業発達史の研究からオーストリア＝ハンガリー二重王国下の工業発達史の研究へと進んでいた工業史研究が、この時期に「東欧」全体へとその視野を拡げたことが、この時期の東欧史学の新展開に決定的であった。

すでにハンガリー経済史の領域においては 1950 年代に 19 世紀のハンガリーの産業革命の特殊性をめぐってシャーンドルとトルナイのあいだに論争が生じていた。この論争は 1964 年にトルナイがハンガリーの産業革命における農村の繊維工業の発展の可能性を再び主張して以来、方法論的問題をも含めて激しく燃え上った。今回は、60 年代初め以来進められてきた二重王国史の研究とからみ合って、より広い視野で論争が進められた。そし

55) Perényi J., Hol élünk? Közép- vagy Kelet-Európában? (我々はどこに住んでいるか? 中欧か東欧か?), "Élet és Tudomány," 1966, 44 sz.: Niederhauser E., A jobbágyfelszabadítás sajtósági Kelet-Európában (東欧における農奴解放の特徴), u. o., 1967, 29. sz..

て、1967年のカトゥッシュ・ラーズロー (Katus László) の論文『東欧の工業化と「自立的」資本主義発展の問題によせて』以来、問題は直接に東欧的規模で論じられるようになり、やがて、ベレンドおよびラーンキによる共同論文『東欧および東南欧における産業革命の問題によせて』(1968年)によって、論争とは離れた東欧の産業革命自体の研究へと展開された。<sup>56)</sup>

トルナイの反対者たちは、まず、ハンガリーの農村繊維工業が発達しなかったのは1848年以後の対墾従属(共通関税)という特殊な外的要因のためではなくて、ハンガリーを含む東欧の西欧への一般的な従属的経済関係のためであることを論じた(とくにカトゥッシュ論文)のち、次のことを積極的に主張した。一つには、ハンガリーの、ひいては東欧の、産業革命を研究するためにはイギリスのモデルを機械的に適用することは有益ではないということであった。彼らは土地制度史の領域で成果を生み出した比較史の方法を用い、工業史の領域においてもイギリスの発展段階をもって東欧の発展を測ることを拒否したのであった。イギリスとは異なった歴史的条件下にある東欧の産業革命は、それ自体としてあるがままに研究されねばならないとされたのである。第二の論点は、二重王国下におけるハンガリーの従属的(あるいは半植民地的な)経済的地位、ひいてはヨーロッパにおける東欧のそれは、単に否定的に解釈されるべきではなく、歴史の裏返しができない以上、あるがままに現実的に評価されねばならないということであった。これらの論点は、単に産業革命における指導的工業部門(農村の繊維工業か都市の商人資本の食料品工業か)の問題だけでなく、資本輸入や産業革命の歴史的位置づけの問題にまでかかわっていた。

このような東欧の産業革命の研究は、やがて、従来の土地制度史研究を吸収して、東欧の資本主義発展全体を扱った野心的研究を生み出した。自らの長年のハンガリー経済史の研究の上に立って、1969年に出版されたベレンド＝ラーンキの共著『19～20世紀の中東欧の経済発展』<sup>57)</sup>は、この時期の東欧経済史研究において画期的な意味を持っていた。第

56) この一連の論争は、Tolnai Gy., *A paraszti szövő-fonóipar és a textilmanufaktúra Magyarországon 1840-1849* (ハンガリーにおける農民の織布・紡糸工業と繊維マニュファクチャー—1840-1849年—), Bp., 1964; Berend T. I., *Az iparfejlődés és az úgynevezett parasztipar kérdéséhez* (工業発展といわゆる農民工業の問題によせて), "Történelmi Szemle," 1965, 2-3 sz.: Tolnai Gy., *Az önálló tőkés fejlődés a nacionalizmus megítélése a mai magyar gazdaságtörténetírásban* (今日のハンガリー経済史学における自立的資本主義発展と民族主義の判断), "Történelmi Szemle," 1966, 1 sz.: Katus L., *A kelet-európai iparosodás és az "önálló" tőkés fejlődés kérdéséhez*, "Történelmi Szemle," 1967, 1 sz.: Berend T. I.—Ránki Gy., *Az ipari forradalom kérdéséhez Kelet-Délkelet Európában*, "Századok," 1968, 1-2 sz. (この論文は、*Social-Economic Researches on the History of East-Central Europe*, Bp., 1970 にロシア語版がある): Ránki Gy., *Az osztrák-magyar monarchia gazdasági fejlődésének néhány kérdéséhez* (オーストリア＝ハンガリー二重王国の経済発展のいくつかの問題によせて), "Valóság," 1968, 5 sz.: Tolnai Gy., *Önálló gazdasági fejlődés vagy tőkés függés* (自立的経済発展か資本主義的従属か), "Valóság," 1968, 6 sz..

57) Berend T. I.—Ránki Gy., *Közép-Kelet-Európa gazdaság fejlődése a 19-20. században*, Bp., 1969. 両者はハンガリー経済史の共同研究から出発した。*Magyarország gyáripara az imperiaizmus első világháború előtti időszakában* (第一次帝国主義世界戦争前のハンガリー大工業), Bp., 1955; *Magyarország gazdasága az első világháború után 1919-1929* (第一次世界大戦後のハンガリー経済—1919-1929年—), Bp., 1966; *Magyarország gyáripara a második világháború előtt és háború időszakában 1933-1944* (第二次世界大戦前および戦時中のハンガリー大工業—1933-1944年—), Bp. 1958; *Magyarország a fasiszta németország "életterében" 1933-1939* (ファシズム・ドイツの「生活圏」下のハンガリー—1933-1939年—), Bp., 1960. そのほか、Berend T. I., *Gazdaságpolitika az első ötvenes terv megindulása 1945-1949* (第一次五カ年計画出発期の経済政策—1945-1948年—), Bp., 1964; Ránki Gy., *Magyarország gazdasága az 3 éves terv időszakában 1947-1949* (三カ年計画期のハンガリー経済—1947-1949年—), Bp., 1963.

一にそれは農業・工業・信用の資本主義的発展や資本輸入や国家の経済的役割などを総合した東欧経済史であった。第二に、それは、東欧の社会主義建設という問題意識から、従来不十分であった両大戦間期にまで東欧経済史像を拡げていた。第三に、それは、第一次世界大戦までの資本主義成立期について、イギリス的モデルの機械的適用を全面的に再検討し、東欧における産業革命と農業革命の関係、産業革命と鉄道・信用網建設の関係、外国資本や国家の役割、独占資本主義への移行などの諸問題を、全ヨーロッパ的規模での発展の中で考察しなおした。第四に、それは、東欧においては独占資本主義への移行よりも、むしろ1929年の世界恐慌以後の国家独占資本主義の成立のほうを重要視したが、ここでも、ドイツなど先進国のパターンの機械的援用を拒否し、東欧的特質を考察した。

以上が60年代のハンガリー東欧史学を特徴づける最も基本的な流れであるが、この時期にはこれと関連してこれ以外の分野においても研究が著しく展開された。

まず、長年の研究課題であった封建制期の研究について言えば、バルタ・アンタルの初期封建制の構造の研究<sup>58)</sup> パホ・Zs・パールの15～17世紀の「中東欧」の国際経済的位置の研究<sup>59)</sup>が注目される。とくに、東欧における「再版農奴制」の成立、展開過程の研究を続けていたパホ・Zs・パールは、15～17世紀の国際分業の変転の中に東欧経済を位置づけ、「再版農奴制」の成立・展開過程をさらに明らかにした。それは、「地理上の発見」による国際貿易路の変更にもかかわらず、東・西欧の国際分業がむしろ拡大し、それが領主の商品生産を生むような商品経済関係を東欧内部に促進したこと、しかし、17世紀中頃以後の西欧農業の発展が東・西欧の分業を断ち切り、東欧を孤立させ、その中で領主経営は商品経済・資本主義経済の発展を阻止する要素として存在するにすぎなくなったことを論じた。この研究は、先の1963年の著書とあわせて、東欧における「再版農奴制」の成立・展開過程の究明に著しく貢献したものであった。また、方法論的にも、従来の「比較」史の視点に加えて、「国際関係」の視点を導入したものであった。

従来比較的研究の手薄であった封建制期の都市についても、ジメジイ・シャンドル(Gyimesi Sandor)の資本主義成立前夜の西欧と「中東欧」の都市機能の比較研究が現われた。<sup>60)</sup>

この時期の特徴として、民族主義研究の進展を挙げることができる。とくに、この時期には、19世紀から20世紀初めにかけての東欧の民族主義がその社会・経済的基礎にまでさかのぼって研究され始めた。1967年にペレンド＝ラーンキは東欧の民族主義の経済的要因をハンガリーを例にして分析し、この方面の先駆となったが、翌1968年にはペレン

58) A. Bartha, Barbarian and Early Feudal Societies on the Fringes of Europe, *Etudes historiques* 1970, Bp., 1970.

59) Pach Zs. P., A nemzetközi kereskedelmi útvonalak XV-XVII. századi áthelyeződésének kérdéséhez (15-17世紀の国際通商路の移動の問題によせて), "Századok," 1968, 5-6 sz.: Közép-Kelet-Európa és a nemzetközi kereskedelem a XVI-XVIII. században (中東欧と16-17世紀の国際商業), "A Magyar Tudományos Akadémia Filozófiai és Történettudományi Osztályának Közleményei," 1970, 2-3 sz. (*Etudes historiques* 1970, Bp., 1970にこれよりくわしい英語版がある)。

60) Gyimesi S., Az európai városok a kapitalizmus küszöbén (資本主義前夜のヨーロッパ都市), "Századok," 1972, 2 sz.,

ドはさらに資本主義成立期の「東欧」各国の民族主義の経済的要因を比較史的に論じた。<sup>61)</sup> これらの研究においては、資本主義的後進性の自覚が民族主義といかに結合されたかが示された。他方、アラトー・エンドレ (Arató Endre) は『19世紀前半の東欧史』<sup>62)</sup> (1971年)において、同時期の東欧の27の民族と民族体 (nemzet és nemzetiség) の経済的・社会的・政治的・文化的基盤を分析し、それを通じて、19世紀半ばの東欧の農奴解放の諸類型に接近した。

この時期の両大戦間史研究としては、何と云っても、ラツコー・ミクローシュ (Lackó Miklós) のファシズム研究が重要である。彼は、1970年に、長年のハンガリー労働運動史、ファシズム史研究の成果の上に立って、「中東欧」のファシズムについて論じた。<sup>63)</sup> 彼はこの地域のファシズムの社会・経済的基盤を分析し、ドイツのファシズムに適用される金融寡頭制概念をこの地域のファシズムに機械的に適用することを拒否した。そして彼は、「中東欧」のファシズムの特殊性として、資本主義発展のおくれに基づく封建制の残存およびこの地域特有の民族主義とファシズムとの結合を強調した。このような先進国モデルの機械的適用の拒否は、当時のハンガリー史学一般の流れに対応したものであった。

第二次世界大戦後の変革過程の研究としては、大戦終期の「東欧」の社会的変革にかんするシュトゥー・オットー (Sütő Ottó) の研究<sup>64)</sup> 東欧の戦後の復興と資本収奪の過程や、戦後の経済成長と経済構造変化にかんするベレンド＝ラーンキの研究<sup>65)</sup>などを挙げる事ができる。

以上のように、ハンガリー東欧史学は1960年代末から1970年代初めにかけて、広い分野にわたって飛躍的發展を示した<sup>66)</sup>のであるが、この時期の研究の方法上の特徴として、

- 61) Berend T. I. - Gy. Ránki, Economic Factors in Nationalism: the Example of Hungary at the Beginning of the XXth Century, "Austrian History Yearbook," 1967; Berend T. I., A nacionalizmus néhány gazdasági tényezője a modern tőkes fejlődés kibontakozása idején Kelet Európában (東欧における近代資本主義発展の開始期の民族主義のいくつかの経済的要因), "A Marx Károly Közgazdaságtudományi Egyetem tudományos ülésszaka," 1968.
- 62) Arató E., *Kelet-Európa története...*, Bp., 1971.
- 63) Lackó M., A fasizmus Kelet-Közép-Európában (中東欧のファシズム) "Uj Írás," 1970, 12 sz.: К вопросу о фашизме в Юго-Восточной Европе, *Etudes historiques 1970*, Bp., 1970. 彼の研究の主なものは, *Adalékok a budapesti munkásság összetételéhez az 1920-as évek végén* (1920年代末のブダペスト労働者階級の構成について), Bp., 1958; *Ipari munkásságunk összetételének alakulása 1867-1949* (ハンガリー工業労働者階級の構成の確立 —1867-1949年—), Bp., 1961; Gyári munkásságunk összetételéről az ipari forradalom időszakában (産業革命期のハンガリー工業労働者階級の構成について), "Századok," 1960, 4 sz. (ロシア語版が *Etudes historiques*, Bp., 1960); *Nyilasok, nemzetiszocialisták 1935-1944* (矢十字党と民族社会主義者, 1935-1944年), Bp., 1966 (英語版, *Arrow-Cross Men, National Socialists 1935-1944*, Bp., 1963).
- 64) Sütő O., A teherani, a jaltai és a potsdami kormányfői értekezletek és a kelet-európai társadalmi változások kérdése (1943-1945) (テヘラン, ヤルタ, ポツダム首脳会談と東欧の社会的変換の問題, 1943-1945年), "Parttörténeti Közlemények," 1968, 2 sz..
- 65) Berend T. I. - Ránki Gy., Gazdasági növekedés és struktúraváltozások a kelet-európai szocialista országokban a második világháború után (第二次世界大戦後の東欧社会主義諸国の経済成長と経済構造変化), "Parttörténeti Közlemények," 1970, 1 sz. (ロシア語版が *Etudes historiques 1970*, Bp., 1970); Helyreállítás és tőkékisajátítás a népi demokratikus országokban a felszabadulás után (解放後の人民民主主義諸国における復興と資本収奪), "Történelmi Szemle," 1970, 2 sz..
- 66) この時期に東欧史の教授用材料として東欧史資料集が出版された。Uj és legújabbkori egyetemes történeti szöveggyűjtemény (近・現代世界史資料集): 4. Kelet-Európa 1789-1900, Szerk. Niederhauser E., Bp., 1968; 5. Kelet-Európa 1900-1945, I-II, Szerk. Dolmányos I., Bp., 1970.

次の三つのことに注目しておきたい。第一に、この時期に「中東欧 (Közép-Kelet-Európa)」という概念が広く使用され始めたことである。従来のハンガリー東欧史学が、東欧と西欧の発展の相違の始まりの解明に関心を持ちつつ、封建制から資本制への移行期の土地制度史の観点から、「東欧」の広い枠組の中に「再版農奴制」の成立を見た「狭い意味の東欧」とトルコの封建制下の「バルカン」とを区別したのに対し、東欧の資本主義発展や社会主義建設という現代的問題意識から過去を見る傾向の強い新しい東欧研究は、従来の「狭義の東欧」から社会主義建設を一步早く始めたロシアを除いた部分と戦後社会主義の道に入った「バルカン」とを合わせた「中東欧」なる概念を普及させたのであった。(したがってこの「中東欧」はハンガリー以外の東欧諸国で用いられる「中・東欧」とは区別される。) この概念はとくにロシア革命以後の東欧史研究に有効な概念であった。

第二に、この時期には、東欧経済史研究に「国際関係 (nemzetközi kapcsolat)」の視角が導入された。つまり、依然としてこの時期のハンガリー東欧経済史学の中心的方法は比較史の方法であったが、この時期には、個々の歴史段階における西欧と東欧の関係、東欧内部での相互の関係が研究されるようになった(パホ・Zs・パールやベレンド＝ラーンキの研究)。この「比較」と「関係」の視点はハンガリー東欧史学に伝統的なものであり、この両者を備えることによってハンガリー東欧史学は各歴史的段階における東欧の一体性、東・西欧の一体性というペレーニイの提起した課題にも答えうるようになったといえよう。と同時に、歴史的・国際的環境が異なるがゆえに先進国の発展段階を後進国がそのまま歩むことはありえないとし、東欧の特殊性を強調する研究視角からすれば、この国際関係の視角の導入は当然のことであった。

第三に、この時期に、封建制の歴史と同様に、東欧の資本主義発展の歴史も「特殊性 (sajátosság)」の中に把握されることになったことを挙げねばならない。前段階の東欧史研究が、東欧の封建制から資本制への移行過程をイギリス的パターンとは質的に異なるものとして描き出したのと全く同様に、この時期の研究は東欧の資本主義の発展がイギリス的パターンとも、ドイツ的パターンとも質的に異なるものとして描いた。これは、戦後の東欧(とくにハンガリー)の社会主義建設へのソヴェト・モデルの機械的導入を「ドグマティズム」として鋭く批判する今日のハンガリー史学の態度から出発して考えれば、その意味がより明確になると思われる。さらにまた、第一次大戦前の資本主義の発達史にかんしては、ブルジョア民主主義革命に終わった1918～19年のハンガリー革命の経済的基礎の究明という問題意識が作用していることも指摘しえよう。

さて、最後に、本節で見てきたような戦後のハンガリー「東欧」経済史研究の蓄積は、ハンガリー史学に東欧経済史を超えた「世界」経済史の方法を志向させていることに触れておきたい。1970年の国際経済史学会でベレンド＝ラーンキは、世界経済史の概念と方法にかんする報告<sup>67)</sup>を行ない、「地域間比較 (regionális összehasonlítás)」の積み上げによる世界経済史の構成を提案した。それによれば、世界を自然—地理的、政治—経済的条件の類似した幾つかの国からなる「地域単位」に分類し、まずその内部での比較史的経済研

67) Berend T. I. -Ránki Gy., Az egyetemes gazdaság történet módszeréhez és felfogásához (世界経済史の方法と概念について), "Századok," 1971, 1 sz..

究を行ない——ちょうど「中東欧」経済の比較史研究のように——，ついでそれら「地域単位」間の比較史研究を世界的規模で行なうことによって，世界経済史研究に近づこうというのであった。

こうして，「東欧」経済研究は「世界」経済史研究の有機的一部分として位置づけられることになった。これは，1965年のペレーニイ論文をいっそう発展させたものであり，ハンガリー東欧経済史学の強い自信を示すものであった。

〔以下の各節では東欧の封建制から資本制生産の成立期（第一次世界大戦前期）までの主要発展段階にかんするハンガリー東欧経済史学の成果を紹介するが，扱われる時期がロシア革命前であるので，東欧の定義については，広い意味での「東欧」の中に「狭い意味の東欧」と「バルカン」を分けるにとどめたい。〕

## II. 封建制の変質

### a. 前期封建制

ニーダーハウザー・エミールの1958年のエッセーによれば，東欧の人種的・政治的構図はスラヴ民族の移動の結果として6～10世紀にでき上り，10～11世紀のあいだに東欧の初期封建制は本質的に西欧のそれと同じ性格のものとして確立された。確かに東欧の封建制には西欧のそれとは違う特殊性があったが，それは主として東欧の封建制が西欧のそれより遅れて成立したことに由来するものであった。そして，14～15世紀までには東欧の封建制はすべての面で西欧のそれに追いつき，封建制成立の遅れを克服した——それは，農奴（serf）から隷農（villain）への移行，都市の発展，国家の中央集権化などの面で認めることができた。こうして，15世紀頃には，東欧の封建制はその発展した段階に達し，西欧のそれと同じ発展方向（封建制の解体）を展望していたとされた。<sup>68)</sup>

このエッセーをめぐってハンガリー科学アカデミー歴史研究所で開かれたシンポジウムにおいて，この東・西欧の封建制の形態と性格の相違が一つの争点となった。一つには，封建制成立の時期的相違ではなくて，地理的・人種的相違が封建制の形態や性格の相違をもたらしたという意見があった。また，一つには，古代文明の影響の有無が強調された。つまり，西欧の封建社会は奴隷制的階級社会である古代地中海文明の直嗣として現われ，旧社会の技術的・経済的・文化的成果をより高い水準に押し上げたが，東欧のそれは原始共同体社会の解体のあとに最初の階級社会として現われた。したがって，ここではスラヴ的部族共同体（nemzetség）やアジア的遊牧民の「ホルド（horde）」の影響が残っていたというのであった。この点，バルカンでは，封建社会が部族共同体を解体させず，共同体を永く存続させたという点で，他の東欧との違いが認められるとされた。さらに，東・西欧の封建制期の都市および工業の発展の相違も指摘された。西欧の都市が封建権力と戦って自治権を獲得したという点を別としても，西欧の都市が農村へ浸透して農村市場を把握したのに対し，東欧の都市は外国（とくにドイツ）の商人資本によって直接に外国市場と結合されていた。それゆえに，東欧では，都市と農村の分業（国内市場）が発達せず，農村

68) E. Niederhauser, Zur Frage der osteuropäischen Entwicklung, s. 360-361.

の大衆消費財を供給する国内工業が発展することがむつかしかったというのであった。<sup>69)</sup>

しかしながら、その後のハンガリー東欧史学は、以上のような東・西欧の封建社会の相違にもかかわらず、15世紀頃の東欧の封建制の発展は、本質的には（土地制度史的には）西欧のそれと同じ方向と水準にあったこと、また、東欧内部の諸民族（バルカンを含めての）間の発展のそれも相互に類似していたことを強調した。そして、これはハンガリー史学だけでなく、他の東欧諸国の史学も一致して認めていることであると言われた。<sup>70)</sup>

当時の東・西欧の封建制の基本的（土地制度史上の）方向は、パホ・Zs・パールの比較史研究から次のように要約しえよう。

(a) 西欧では封建制が最盛期を迎えたのちその解体が進行した。西欧では15世紀までに労働地代や生産物地代に代わって貨幣地代が支配的な封建地代形態になっていた。そしてこの地代形態の変化とともに封建的土地所有も解体に向かい、農民的土地所有が広く成立しつつあった。

(b) ハンガリーその他の東欧諸国においても、15世紀末までは西欧と同じ社会発展の展望があった。14～15世紀の間に、農業生産力の発展の結果として、東欧の封建制においても、労働地代に代わる生産物地代そして貨幣地代への転換が生じていた。そして、依然封建的土地所有が支配的であったとはいえ、しだいに農民的土地所有が現われ、賃労働を用いて商品生産を行なう富農経営さえ出現していた。<sup>71)</sup>

この時期のバルカンにおける封建地代形態の変化や土地所有関係の変化については、ハンガリーでの研究は進んでいないが、バルカンについても上と同じことがある程度言えると考えられているようである。

しかしながら、15世紀末以後、東欧の社会発展は西欧のそれから決定的に区別される展開を見せ、また、東欧の内部でも「狭義の東欧」と「バルカン」とのあいだに決定的な発展の相違が生じることとなった。

b. 後期封建制——西欧的發展からの乖離(ekanyalozás)——

東欧（狭義の東欧）の社会的発展が西欧のそれからいかに乖離したのか、それはいつ生じたのか——この問題は、東欧の資本主義的發展ひいては社会主義的發展の特殊性の理解の鍵になる問題として、1956年の「個人崇拜」批判以後、東欧の経済史家の真剣な関心を集めた問題であった。

問題の核心は、16～18世紀の東欧経済を支配していた領主農場経営（いわゆる Guts-wirtschaft, барщинное хозяйство, földesúri gazdaság）およびそこに復活した農奴制（いわゆる「再版農奴制」zweite Leibeigenschaft, второе издание крепостничества, jobbágyrendszer második kiadása）の本質の理解にかかっていた。

1956年（シンボリックな意味で）以前に支配的であった見解は、これを封建制から資本制への移行の形態ないしは資本の本源的蓄積の形態と見なし、東欧の発展が西欧での資本主義發展の法則に合致した歩みを見せており、せいぜい若干の時間的、量的遅れがあるに

69) A kelet-európai országok feudalizmuskori fejlődésének sajátosságairól, 469–472 1..

70) P. Hanák, Problems of East European History, p. 125.

71) Pach Zs. P., Nyugat-európai és magyarországi agrárfejlődés..., 13–98 1..

すぎないことを示そうとしていた。<sup>72)</sup> だが、1956年以後、ジェンタラやスカスキんに導かれた新しい研究は、この時期の東欧経済の発展過程は質的に西欧モデルから区別されるものであり、この時期に東欧の封建制は解体に向かうどころかむしろ再強化されたことを示した。「再版農奴制」は封建制の再強化の結果なのであった。<sup>73)</sup> 当然、この新しい研究方向は、「再版農奴制」の成立の原因にかんする研究を促進した。50年代末の一般的見解は西欧への穀物輸出の拡大（国外市場の拡大）が領主の所得を増加させ、それが階級的力関係を領主に有利に転換させ、農奴労働に基づく領主商品経営を成立させたとしていた。<sup>74)</sup>

ハンガリーの東欧史学はこの新しい流れに合流して、それを一層押し進めた。1958年のニーダーハウザのエセーは、東欧の発展の西欧からの乖離の原因およびその時期の設定の点で、最も激しい論議を引き起こした。彼は東欧の乖離の原因としては、トルコの支配の強化とその脅威、および、「地理上の発見」による国際通商路の変更を重視し、乖離の始点を15世紀から16世紀への変り目に置いた。彼によれば、1453年のコンスタンチノープル占領以来強化されたオトマン・トルコの支配と脅威は、東欧の商工業や都市の発展を著しく阻害し、東欧を単なる農業地域に押しとどめた。また、15世紀末の地理上の発見によって国際通商路が地中海およびヨーロッパ大陸から大西洋へと移動したことは、西欧に急速な経済発展を可能にし、それを世界の商工業の中心とする一方、東欧をその経済的後背地とし、そこへの穀物や肉類の供給地たらしめた。これは農産物需要の増大を意味したが、東欧の封建領主はこの需要増に対して農民から搾取する生産物地代や穀物地代では満足せず、穀物輸出による収入を基礎に自ら領主直営地において大規模農場を経営し、農民保有地を没収して農場を拡大するとともに農民を再び農奴として使用し始め、ここに「再版農奴制」が成立したというのであった。<sup>75)</sup> いずれの要因も、従来のハンガリー史学において説かれていた<sup>76)</sup> ことであり、その意味でこのエセーはハンガリー史学の産物であったが、ここでの「再版農奴制」成立の分析はいまだ粗いものであった。

ニーダハウザーのエセーをめぐる歴史研究所で開かれたシンポジウムでは、上の点にかんして最も活発な議論が戦かわされた。ここでの最も支配的な意見は、東・西欧の発展の相違は、地理上の発見やトルコの脅威によるのではなく、14世紀から15世紀の変り目以来進展してきている東・西欧での社会的分業の発展の相違によるというものであった。それによると、西欧の農業発展は14世紀末までには停滞状態に至り、発展しつつある工業（マニュファクチャー）の農産物需要に応じ切れなくなったのに対し、東欧ではまさに14世紀末頃から改良農法の導入などによって生産が伸び始めた反面、工業の発達が遅れて

72) Pach Zs. P., *Az eredeti tőkfehalmozás Magyarországon*: J. Nichtweiss, *Zur Frage der zweiten Leibeigenschaft...*: A. Wyczański, *O folwarku szlacheckim w Polsce...*: A. Klíma-J. Macúrek, *Zum Problem des Übergangs vom Feudalismus zum Kapitalismus, XI<sup>e</sup> Congrès International des Sciences Historiques* などを見よ。

73) B. Zientara, *Z zagadnień spornych tzw. "wtórnego poddaństwa"...*: С. Д. Сказкин, *Основные проблемы так называемого „второго издания крепостничества”* などを見よ。

74) Lásd., Pach Zs. P., *A XV-XVIII. századi agrárfejlődés egyes kérdései...*, "Századok," 1961, 2-3 sz. 231 l..

75) E. Niederhauser, *Zur Frage der osteuropäischen Entwicklung*, s. 363.

76) Pach Zs. P., *A magyar történettudomány 25 éve (ハンガリー歴史学の25年)*, "Történelmi Szemle," 1970, 2 sz., 134-136 l..

おり、国内市場の形成が進まなかった。こうして、この時期以来、東欧と西欧の間に特殊な分業関係が成立し、東欧は農産物輸出地となり、この中で領主の直営農場が発展したのであった。この見解によれば、15世紀末からのトルコの侵略の影響および国際通商路の変更は、この基本的過程を促進しただけにすぎなかった。<sup>77)</sup>

しかし、この段階では、いずれの見解も東欧における「再版農奴制」の成立の原因と過程を十分には説明していなかった。東・西欧間の国際分業の影響を重視する点では意見の一致があったが、その分業の発展の過程や領主経営の経済的活発化の過程や農奴労働への逆転過程などは、すべて未解決のままに残された。この問題の解決は、1950年代末からのパホ・Zs・パール<sup>78)</sup>の体系的な研究が1963年に発表されるまで待たねばならなかった。主として比較史の方法によった63年の研究は、その後60年代の末に国際経済関係の分析を加えて、いっそう精密化されたが、パホの一連の研究<sup>78)</sup>の結論は次のように要約するであろう。

(a) 15世紀までに西欧の封建的發展に追いついた東欧の社会史にとって、15世紀末から16世紀末までは西欧的發展からの乖離への移行期であった。15世紀末の地理上の発見による国際通商路の移動は、国際分業における東欧の地位の低下を直ちにもたらすものではなく、むしろ東・西欧間の経済交流を刺激した。東欧は西欧から毛織物をはじめとする工業製品を輸入し、西欧へ農産物（とくに食糧品—穀物・肉・酒類—）を輸出するという関係に立った。<sup>79)</sup>

この国際分業は東欧に商品経済を浸透させ、すでに15世紀に芽ばえつつあった農民の商品生産を拡大させた。しかし同時に、この商品経済の発展は、領主の商品輸送業の開始をもたらし、やがては領主の商品生産自体をももたらした（この領主の経済活動の活発化がいかにかに生じたかに生じたかについては、パホは十分に明らかではない）。16世紀は、農民的商品生産と領主的商品生産の二者が互いに優位を競い合う時期であった。確かに、農民戦争の敗北は農民的商品生産をしだいに不利にはしたが、この時期にはまだ農民的商品生産と領主的商品生産との戦いは決着を見ていなかった。それと同時に、領主的商品生産においても、賃労働（bérmunka）が用いられる（gentry型）か農奴労働（robot）が用いられる（gutsherr型）かという問題も、この時期にはまだ決着を見ていなかった。この二重の意味で16世紀は移行期であった。

(b) 16世紀の終りから領主的商品生産とそこでの農奴労働の使用が明白に優位を占め始め、17世紀中頃までにその地位を確定した。この過程もまた西欧との経済関係の高まりの中で進行した。この頃までに世界的国際貿易の主要商品はインド産の綿織物になり、西欧のマニュファクチャーで生産される毛織物は世界市場から駆逐されつつあった。そのよ

77) A kelet-európai országok feudalizmuskori fejlődésének sajátosságairól, 473–478 1..

78) Pach Zs. P., *Nyugat-európai és magyarországi agrárfejlődés: A nemzetközi kereskedelmi útvonalak...*: Közép-Kelet Európa és a nemzetközi kereskedelem... が重要。

79) パホによれば、当時の西欧と新大陸、東インドの貿易は、いまだ旧来の東西交易と同じく貴金属や特産品の貿易であり、これはやがて工業品と農産物の貿易に変わっていくはずのものであった。彼は前者を「中世的」(középkori, medieval) 貿易、後者を「近代的」(újkori, modern) 貿易と称し、当時の東欧と西欧に早くもこの「近代的」貿易が成立していたことに注目している。

うな毛織物にとって唯一の重要な市場は東欧市場であった。この時期に東・西欧の農・工業分業は依然として発展を続けていたのである。

この国際分業の発展を背景に、東欧の農業の封建的・反動が確立していった。15世紀末以来の活動で実力を蓄わえた領主的商品生産は、16世紀末以後、政治権力と商品輸送の掌握を武器に農民的商品生産を駆逐し始めた。国際市場向け生産を領主に押えられた農民的商品生産は、狭い地域的市場向けの生産を続けうるだけになった。さらには、農民的商品生産のみならず農民の単純生産も領主経営に吸収されていった。これと同時に、領主的商品生産は、その政治権力を背景に戦争による労働力不足を契機として、再び農奴の労働地代に基づく生産を定着させた（この農奴労働の再現の過程は必ずしも経済学的に十分に説明されているとは言えない）。こうして、17世紀の中頃までに、東欧においては農民的商品生産に対する領主的商品生産の勝利、領主経営のジェントリー的発展に対するグーツヘル的発展の勝利が確定した。

(c) しかし、17世紀中頃までには世界的国際分業は新たな転換を見せており、その中でこの領主的商品生産はそれ自体の矛盾を現わすこととなった。

17世紀中頃までに、西欧では、新品種の導入や農耕技術や農法の改善により、独立自営農民や資本主義的借地農の生産性が著しく高まり、それ以後一世紀のあいだ穀物を輸出することになった。この西欧のブルジョア的農業に比べて東欧の封建的農業は生産力において劣っており、この時期以後東欧から西欧への農産物輸出は低下していった。他方で、西欧の毛織物は拡大する新大陸貿易に再び市場を見出していた。

こうして、17世紀の中頃以後、東欧経済は世界経済の発展からほとんど孤立した。領主経営は農奴の原始的な農具と強制労働で生産を続けたが、生産力は発展せず、かつての商品生産は単なる自給的閉鎖経済となって、商品生産・資本主義的生産の発展を妨げた。こうして、封建制から資本制への移行の開始は18世紀の末まで待たねばならなかった。

(d) 他方、西欧の都市においてはギルドが解体しマニュファクチャーが普及したのに対し、ハンガリーその他の東欧では都市は衰退した。15世紀末以来の新しい国際分業の展開は、東欧の農業を刺激したが、国内分業の形成を抑制し、都市と工業の発展を妨げていた。これは、17世紀中頃までに農民的商品生産やジェントリー的発展を敗北させた一因であるとともに、17世紀中頃以降の東欧の孤立の中であって、国内市場を基礎とする東欧独自の発展を妨げたのであった。

(e) 以上の経済過程を基礎に、封建貴族階級がブルジョア階級および農民階級に対して支配権を握り続けた。そして封建制の盛期ののちにその急速な解体を見た西欧とは対照的に、東欧では盛期の封建制ののちにいわゆる「後期封建制 (late fudalism, kései feudalizmus)」の成立を見たのである。

パホ・Zs・パールの研究は、以上のように、東欧の西欧的発展からの乖離は、より早期に資本主義の出発した西欧が支配する国際的諸条件への、一歩発展の遅れた東欧の適応として生じたことを示した。彼の研究は、「再版農奴制」の成立過程についてはまだ解明の不十分な点を残しているとはいえ、その成立と展開のダイナミズムを明らかにし、その歴史的位置を確定していた。また、彼の結論は他の多くの東欧の歴史学の成果と基本的に一

致していた。<sup>80)</sup>

ポーランドの J・トポルスキの最近の研究はパホの研究に基本的に一致しているが、なおパホにおいて十分に明らかではない点を補なっている。一つは、16 世紀における領主の経済活動の活発化の原因である。トポルスキによれば、封建制後期のブルジョア階級および農民階級の経済活動の活発化は、一方では資本主義的發展の展望を与えたが、他方で、封建領主の所得の危機的低下をもたらしたのであり、これが 16 世紀に領主の経済活動を活発化したのである。ただし、彼も 16 世紀を農民的生産と領主的生産の競争、賃労働と農奴労働の競争のあった過渡期としている。第二に、17 世紀に入ってから領主経営の「再封建化」の過程について、彼は、三十年戦争などによる物的・人的資源の欠乏のほかに、農産物の対工業品交換比率の低下を指摘し、これらの条件が農奴労働の拡大によりこのマイナスをカバーする方向へ領主経営を押しやったのであるとした。<sup>81)</sup>

他方、バルカンにおいても、15 世紀の終り以後、古典的封建制の解体傾向は、トルコ支配の強化によって阻止され、トルコの軍事的封建制が植えつけられた。部族共同体的色彩の濃い従来の封建制の上にトルコの封建制 (timár) がかぶせられ、トルコ人封建領主 (spahi) と現地農民 (rája) との過酷な関係が形成された。領主の不断の交替により、土地は事実上農民の所有にあったが、土地区分は小さく、封建地代その他の負担は重かった。反面、ここでも他の東欧と同様に 16 世紀以後、領主自身の農業経営 (çiftlik) が発生していた。しかしこれは、広汎な現象ではない上、個々の経営も小規模であった。この間、バルカンの都市はトルコ支配下にあつて、例外的な発展を示していた。こうして、15 世紀以来、バルカンは西欧的發展から離れただけでなく、他の東欧諸国とも著しく違った発展の道を歩むこととなった。<sup>82)</sup> しかしながら、これまでのところ、ハンガリー史学においては、バルカンのこの時期の発展はほとんど研究されていないと言える。

「後期封建制」に関連して、ハンガリー史学における封建国家の研究に触れておきたい。まず、封建制の再強化は、封建的無政府性を促進し、ブルジョア階級の形成を阻止し、したがって民族国家の形成を困難ならしめ、東欧に多民族国家 (ハプスブルク帝国、ロシア帝国、オトマン=トルコ帝国) を成立させた。<sup>83)</sup> また、これらの帝国の中では、中央集権化や絶対主義の性格も西欧とは異なっていた。絶対主義中央権力と地方の領主権力との対立は民族独立闘争の形をとり、中央集権化が民族国家 (国民経済) の形成と同意義ではなかった。<sup>84)</sup> さらに、絶対主義も、東欧では、封建貴族とブルジョア階級の階級対立の産物ではなく、上層貴族に対する中層貴族、ブルジョア階級<sup>85)</sup>、農民階

80) P. Hanák, Problems of East European History, p. 126-127.

81) Lásd., J. Topolski, A nagybirtok gazdaságának refeudalizálódása...: Berend T. L., Az Nemzetközi Gazdaságtörténet Kongresszus...

82) N. Todorov, Sur Quelques Aspects du Feodalisme au Capitalisme...: Некоторые вопросы статута и облика балканского города XVI-XVII. вв. を見よ。

83) E. Niederhauser, Zur Frage der osteuropäischen Entwicklung, s. 362.

84) Lásd., Elekes L., Az európai feudális államok központosításának néhány kérdéséről (ヨーロッパの封建国家の中央集権化のいくつかの問題について), "Történelmi Szemle," 1959, 5-6 sz. *Revidés és központosítás...*

85) Voir., Molnár E., Les fondements économiques et sociaux de l'absolutisme.

級の共通の利害を基礎に成立していた。

ここでハンガリー東欧史学のこの分野での最大の弱点について述べなければならない。確かに、「再版農奴制」を封建制から資本制への直接的移行の形態と見る解釈は否定され、資本制への移行は18世紀末以後の問題とされたのではあるが、それでもなお封建制下における資本主義の萌芽の問題は残っているわけである。

第一に、農業において、「再版農奴制」に基づいた領主経営が単なる封建的反動であったのか、あるいはそのもとで農民階級の分化が進行したのか、もし農民層の分化が生じていたのなら、それはいつ始まり、どの程度に進行したのかという問題がある。これは東欧におけるブルジョア階級の発展あるいはその弱体性の研究に不可欠の問題である。この問題は、一国史的とはいえソヴェトの文献では活発に論議されている<sup>86)</sup>が、ハンガリーでは十分な研究が行なわれていないと言える。

第二に、上の点に関連して、東欧の「マニュファクチャー」の発展にかんする問題がある。東欧においては、マニュファクチャーの発展は非常に複雑な道をたどった。富農による農村のマニュファクチャーや商人資本による都市のそれがあったが、大部分は領主や絶対主義国家によって「上から」植え付けられたものであり、農奴の強制労働を用いていた。これらのマニュファクチャーは地域と時代によって形態や性格を異にしていた。ここから、どのような種類のマニュファクチャーが資本主義的と見なされるのか、そのようなマニュファクチャーの比重はどの程度で、いつ発展を始めたのかという問題が出てくる。これまでのところ、ハンガリーを含めて東欧各国の歴史学は一国史的にこの問題に接近しているだけで、東欧的規模での研究には乗り出していないと言わねばならない。<sup>87)</sup>

第三の問題は、資本主義の発展の観点から見た「啓蒙」絶対主義の経済政策の評価の問題である。東欧の絶対主義は、財政危機を契機として、一方では直接・間接にマニュファクチャーの発展を促進し、他方では領主に対する農民の封建義務を制限し、農奴の身分的解放を進めたが、これらの経済政策はその本来の目的とは別に、資本主義の発展を促進した。しかし、ハンガリー史学は、啓蒙絶対主義の否定的側面を強調した50年代の見地に影響されて、この問題に十分な注意を払っていないと言われている。<sup>88)</sup>

86) ソヴェトでのこの分野の研究の主たる方向は、С. Н. Сказкин, Основные проблемы так называемого „второго издания крепостничества”; В. К. Яцунский, Основные этапы генезиса капитализма в России, «История СССР», 1958, № 5; С. Д. Сказкин-А. Н. Чистозвонов, Задачи изучения проблемы генезиса капитализма; А. Л. Сидоров, Некоторые проблемы развития российского капитализма в советской исторической науке, «Вопросы Истории», 1961, № 12; «Переход от феодализма к капитализму в России», Москва 1969; «Теоретические и историографические проблемы генезиса капитализма», Москва, 1969 からうかがうことができる。

87) ソヴェトでのマニュファクチャー研究の主なものは、С. Г. Струмилин, Экономическая природа первых русских мануфактур, «Вопросы Истории», 1948, № 6; Э. С. Витенская, О характере русской посессионной мануфактуры, «Вопросы Истории», 1954, № 2; Ф. Я. Полянский, «Экономический строй мануфактуры в России XVIII века», Москва, 1956; В. К. Яцунский, Основные этапы генезиса капитализма в России; А. Л. Сидоров Некоторые проблемы развития российского капитализма。ハンガリーでは、Endrei Walter, *Magyarországi textilmanufaktúrák a 18. században* (18世紀のハンガリー繊維マニュファクチャー), Bp., 1969 をあげうるにすぎない。

88) P. Hanák, Problems of East European History, p. 130-131.

最後に、これらすべての問題は、東欧における資本の本源的蓄積の問題に絡んでいる。もし、18世紀末から資本制への移行を言うことができるとすれば、そのための本源的蓄積の問題が研究されねばならないであろう。貨幣資本の蓄積と直接生産者からの生産手段の分離の過程が解明されねばならない。この研究が「再版農奴制」期と19世紀のブルジョア変革とを結合するはずであった。しかし、ハンガリーでは、ソヴェトの先例があるにもかかわらず、この問題は一国史的にも、東欧史的にも究明が遅れていると言える。<sup>89)</sup>

### Ⅲ. 封建制から資本制生産への移行

#### — ブルジョア的変革 —

東欧各国の歴史学は、18世紀末の数十年(1770~90年代)以後、東欧における封建制は解体期に入り、封建制から資本制への移行期が始まったとしている。<sup>90)</sup> この時期以後、イギリスの産業革命やフランス革命やナポレオン体制の影響によって、国外市場が著しく拡大され、東欧の資本主義の芽が成長し始め、封建制の解体過程が始まったのである。以後、東欧の資本主義は、西欧で産業革命が最盛期を迎えるときに、その発展の第一段階に入るのである。

かくて、東欧経済は、ほぼ一世紀にわたる世界的分業からの孤立を終え、再び世界経済に巻き込まれたが、しかし今度はより進んだ資本主義の支配するそれに巻き込まれたのであった。ハンガリー史家の表現を借りるならば、16~17世紀の東欧の特殊な発展(「再版農奴制」)が西欧の初期資本主義によって支配される近代的世界経済への東欧的適応の第一歩であるとするならば、東欧は18世紀末以来、より発達した資本主義の支配する世界経済に適応しつつ、独自の資本主義的発展を遂げねばならなかった。

この世界経済へ適応しつつ行なわれる東欧の資本主義への移行は、体制としての資本主義の確立をその終期とするならば、18世紀の末から20世紀の始めまでの一世紀以上にわたったと、ハンガリー史学は見ている。<sup>92)</sup> だが、その中に、①封建制の解体と資本主義発展の開始期、②資本主義発展のための制度上の障害を取り除くブルジョア的変革期(狭義の東欧では1848年から60年代まで、バルカンでは60~80年代)、③資本主義の確立へ向けての発展期が区別されている。

89) ソヴェトでは、В. М. Лавровский, Некоторые спорные вопросы первоначального накопления による問題提起以来、研究が行なわれている。全体として、封建制末期の資本主義の萌芽の発展についての研究は、ハンガリーでは、Niederhauser E., *A jobbágyfelszabadítás Kelet-Európában*, 11 1.: Pach Zs. P., *A magyar történettudomány 25 éve*, 137 1. にその必要性がくりかえし強調されているにもかかわらず、一国史的にも東欧史的にも、進んでいない。

90) H. Mottek, *Wirtschaftsgeschichte Deutschlands*, I, II, Berlin, 1964: J. Purš, *The Industrial Revolution in the Czech Lands*, "Historica," II, 1960: Mérei Gy., *Magyar iparfejlődés 1790-1848* (ハンガリーの工業発展, 1790-1848年), Bp., 1951: *Vita magyarország kapitalizmuskori fejlődéséről* (ハンガリーの資本主義期の発展にかんする討論), Bp., 1970: В. К. Яцунский, Основные этапы генезиса капитализма в России: А. Л. Сидоров, Некоторые проблемы развития российского капитализма; Витольд Кула, *Формирование капитализма в Польше*, Москва, 1959 などを見よ。

91) P. Hanák, *Problems of East European History*, p. 133.

92) Berend T. I.-Ránki Gy., *Közép-Kelet-Európa gazdasági fejlődése...*, 21 1..

本節では、最初の二つの時期について検討したい。この時期にかんしては、ハンガリーでは、ニーダーハウザーやアラトーなどの研究が注目される。他の東欧諸国にはこの時期の東欧全体の研究は見出せないから、ハンガリー史学の独断場の感がある。以下、ニーダーハウザーの研究<sup>93)</sup>を中心に紹介しよう。

(a) 18世紀の末以来、国外・国内市場の拡大の結果、それゆえ商品経済の普及の結果、東欧一般に旧封建制（「再版農奴制」下のそれも、トルコ支配下のそれも）は解体過程に入った。拡大した市場のための商品生産は、さしあたり、領主経営における旧来の生産方法（農奴労働、原始的農具、三圃制農法）の集約的活用によって行なわれた。工業においても旧形態の（しばしば農奴を用いた）マニュファクチャーが生産を拡大した。しかし、19世紀の最初の十年までに、生産力の高い資本主義的な（賃労働を用いた）富農経営や領主経営が出現し始め、旧来の領主経営はしだいにその強制的農奴労働の非能率を露呈するに至った。工業においても、農奴制マニュファクチャーは資本制に変えられつつあり、すでに機械制工場も現われ始めた。こうして、封建的生産関係の破たんは急速に進行し、資本制生産への移行が歴史的課題となった。だが、資本の本源的蓄積の不足のために資本制生産への移行は限定され、封建制の解体より緩慢にしか進まなかった。

この時期の東欧の経済過程はハンガリーではまだ十分に研究されていない。最近のアラトーの研究は、この分野をいくらか補って、この時期の東欧の諸民族体ごとに農・工業の発展状態を比較している。全体として、東欧の西部、ポーランド王国およびロシアでの商品生産、農民層分解の進展を指摘している。<sup>94)</sup> また、一概説書によれば、18世紀後半以後の資本主義的商品生産の発展は、プロシアでは地主経営において、ハプスブルク帝国では地主経営と農民経営において、ロシア帝国南部では農民経営において、同中央黒土地帯および西部では地主経営と農民経営において進展していた。<sup>95)</sup> しかし、イギリスの産業革命、フランスの市民革命およびナポレオン体制などの要素を入れつつ、西欧と東欧の有機的経済関係を分析し、その中で東欧の資本主義への発展過程を示すという研究はまだ現われていない。

(b) 資本の本源的蓄積の弱さによる資本主義発展の緩慢さは、東欧の資本主義が封建制に対立してではなく、その中でそれと妥協しながら発展するという方向を設定した。それはブルジョア的変革前の階級関係に反映していた。

ブルジョア階級はハプスブルク帝国（オーストリアやボヘミア）やロシア帝国に存在していたが、弱体であり、封建的国家権力に対立しえず、むしろ、西欧先進国の競争からの保護を求めて国家権力と密接な関係を保った。少数民族のブルジョアジー（ボヘミアやポーランド）のみがそのような思惑から離れていた。これらの地域の労働者階級および都市小市民層（後者はトルコ領にもいた）もまだ勢力は弱かった。潜在的には、東欧に広く存

93) Niederhauser E., *A jobbágyfelszabadítás Kelet-Európában: The Problems of Bourgeois Transformation in Eastern and South Eastern Europe* などを見よ。

94) Arató E., *Kelet-Európa története...*, 17-98 1.. 本書は、フィンランドやカフカズをも「東欧」の中に入れて考察しているが、ハンガリーではこれは広すぎるという批判を受けている。また、「東欧」を27の nationality に細分して、諸民族の経済事情をより具体的に示しているが、この時期の東欧にいかなる再生産圏があり、そこにいかなる問題があったかという点はいまいきになっている。

95) Berend T. I. -Szuhay M., *A tőkés gazdaság története Magyarországon...*, 18 1..

在する農民階級がブルジョア的変革の担い手でありえたが、狭義の東欧では封建領主が彼らの直接的な敵として現われ、遠くの皇帝が一種の幻想をもって彼らの保護者として現われるという問題があり、他方国家権力が農民の直接的な敵として現われているバルカンでは農民運動と民族運動の発展に時間を要した。

狭義の東欧においては、ブルジョア変革の最も重要な勢力は、封建社会の支配階級自身の中から、つまり封建領主の中から現われた。商品生産の発展は、農奴労働の非効率、資本制農業への移行の必要性を多くの領主層に感じさせ、この移行のための自由な賃労働と貨幣資本と土地とが農奴解放を通して保証されるよう、封建貴族の改革運動が始められた。

農奴の身分的解放の必要性は明らかであったが、経済的側面にはいくつかの可能性があった。改革派の貴族層の中の保守的グループは農民保有地の高額の買い戻しを要求し、自由主義グループは買い戻し金なしで農民の土地所有を認めようとし（ハンガリーやポーランドの貴族は農民を民族独立運動に引きつけるためにこの立場をとった）、少数の革命派（と一定の農民）は領主直営地自体の廃止と農民への無償土地分与を要求した。これに対し、中央国家権力は、改革の財政的負担を拒否し、農奴の身分的解放と保有地の保証を宣言するにとどまった。

バルカンでは、地方の封建領主はすべての改革に対して保守的であった。ここでは、諸民族の独立運動がトルコ支配をくつがえすことがブルジョア変革そのものであった。

(c) 一般にブルジョア的変革は民族独立運動と密接に結合していた。多民族大帝国内の諸民族はそれ自身の民族的自覚を高め、独立の民族国家を要求しつつあった。しかし、資本主義的発展が緩慢であったため、その主導権はブルジョア階級の手にはなかった。狭義の東欧では、この運動はリベラルな封建貴族に指導された。その結果、民族独立は完全には達成されず、せいぜい半独立が得られたにとどまり、同時に、ブルジョア変革も妥協的に終わった。他方、バルカンでは、民族運動は農民運動として展開され、その中で反封建闘争と民族独立闘争とが結合し、トルコの追放が封建制の廃止を同時に意味した。したがって、バルカンではブルジョア変革はより徹底的に封建的諸関係を一掃した。<sup>96)</sup>

(d) ブルジョア的変革は、狭義の東欧とバルカンとは、異なった形態をとった。

ハプスブルク帝国（ボヘミアやハンガリーを含む）におけるブルジョア的変革は1848年の革命によって行なわれ、1867年のオーストリア＝ハンガリー二重王国の形成に際して調整されて完了した。プロシアでもナポレオン支配下で始められた「調整」過程が決定的に固められたのは1848年の革命後であった。ロシアではやや遅れて1859～61年の革命情勢に際して改革が行なわれた。ロシア領ポーランドでも1846年のクラカウ蜂起の失敗のち1863～64年の革命期に変革が行なわれた。また、ルーマニアでは、1848年の蜂起によって着手された変革過程は1863～64年に実現された。いずれの場合も変革は「上から」の改革として封建領主層の代表によってリードされた（これは世界経済への後進的東欧の対応の結果であった）。

96) Arató E., *Kelet-Európa története...*, 99-439 1. は、19世紀前半の東欧の民族運動をブルジョア変革の重要な前提として詳しく分析している。それは、多民族帝国における民族抑圧の構造、その抑圧に対抗する諸民族の文化・言語運動、民族独立闘争を分析して、東欧の特殊性を浮き彫りにしている。

変革の最も重要な課題は農奴解放であった。<sup>97)</sup> いずれの国においても農奴解放の最終的帰結は最も保守的な解放の道であった。東欧各国の農奴解放は一般に、①農奴を身分的に解放し、②農奴の封建的役務を廃止し、③農奴の旧保有地に対する所有権を原則として承認したが、④農奴は封建身分、役務、旧保有地を買い戻し (kárpótlás) しなければならず、⑤森林・草地などの所有権を得られなかったほか、⑥旧領主直営地の農奴は土地所有権者の外に置かれた。こうして、農奴解放によって農民階級の一定部分は土地を所有したが、旧領主経営は地主経営として広く維持された (または拡大された)。全体として、これによって地主経営の「プロシア的」資本主義発展のための資本の本源的蓄積の諸条件がある程度与えられた。

ただし、商品生産の発達程度、変革の形態 (革命の有無) 等の相違によって、農民の土地所有の範囲や買い戻しの形態などが異なっていた。土地所有について言えば、(a) プロシアとロシア (ここでは革命がなかったほか、領主直営地が他国より相対的に小さかった) では、農民は旧保有地の一部分しか所有しえず (「切り取り」を受けた)、極端な場合、バルト諸国やメックレンブルクではすべての保有地を領主に取られた。(b) ハプスブルク帝国とルーマニアでは農民は旧保有地の大部分を入手した。(c) ポーランド王国では農民は旧保有地を入手しただけでなく、国有地からも土地を入手した。買い戻しについては、大部分の国では農民が (国家ローンを得て) 直接に支払ったが、ハンガリーとポーランドでは直接には国家がこれを支払い、農民は税として間接的に国に支払う形をとった (この両国では革命の前期に農民は無償で土地を所有したが、最終的には買い戻すことになった)。また、多くの場合、買い戻しは義務とされたが、プロシアとロシアでは、当初これは自発的とされた。<sup>98)</sup>

アラトーは、種々の条件を考慮すると農奴解放の程度は、高い順に、オーストリア、ハンガリー、ロシア領ポーランド、プロシア、ルーマニア、ロシアとなるとした。<sup>99)</sup> 他方、農奴解放は農民階級の一部の都市工業への流入の可能性を与えたが、これは工業の発展したところ (ハプスブルク西部) で実現されたにすぎず、多くの地域では資本不足の工業は農民を農村から吸収しえず、多くの貧農を農村に滞留させた。

トルコ帝国下のバルカンにおいては、ブルジョア的変革は農民階級によって民族運動と結合されて遂行された。ブルガリアでは 1853 年の一定の改革ののちに 1878~79 年に、セルビアでは 1830~33 年の改革のうちに 1871 年に、ボスニア=ヘルツェゴヴィナでは 1858 年に、それぞれトルコからの独立ののちに行なわれた土地改革は、旧トルコの封建的土地所有を廃止し、そのあとに小規模な農民的土地所有を実現させた。農奴解放は、一部では買い戻しの形をとったのに対し、多くは無償であった。他方、領主制商品生産 (giftlik) がいくらか残存したが、これは規模が小さく、むしろ他の東欧の富農経営に近い役割を演じた。こうして、バルカンでは比較的自由的な農民的土地所有の発展の条件が与えられた

97) Niederhauser E., *A jobbágyfelszabadítás Kelet-Európában* は、「東欧」の農奴解放の比較研究の古典的作品である。ただ、筆者には、各国の農奴解放史の並列的比較のほかに、1848 年段階と 1860 年段階の相違も見ることがあるように思われる。

98) Berend T. I. -Szuhay M., *A tőkés gazdaság története Magyarországon...*, 18-19 1..

99) Arató E., *Kelet-Európa története...*, 464-468 1..

が、その小規模性が問題として残った。

アラトーは、バルカンの土地改革は、土地所有に関するかぎり、「アメリカ的」発展の可能性を与えたとしている。<sup>100)</sup>

#### Ⅳ. 資本制生産の確立へ

ブルジョア的変革（農奴解放）によって、東欧諸国は産業革命を終了した西欧の資本主義に適応しつつ、自らの資本主義の確立に向けて発展するより広い可能性と制度的枠組とを与えられた。ブルジョア変革以後の資本制生産の体制的・制度的確立への過程は、ベレンド・T・イヴァーンとラーンキ・ジョルジュの研究が解明を試みている。

両者の見解によれば、19世紀後半の国際経済関係の中では、ブルジョア変革後に最初に資本主義的発展の大道に踏み出したのは農業であった。農奴解放を経てしだいに農業は資本主義化の道（「農業革命」）を歩んだ。この農業の資本主義的発展の必要のために近代的鉄道網や銀行制度が設立され、この総体を国家の経済政策が促進した。国内の蓄積の大部分は農業に投資され、やがて流入してくる外国資本も初めは大部分が農業に向けられた。だが、農業発展のための鉄道網や銀行制度の拡充や外国資本の流入はやがて工業発展を要求したその条件をつくり出し、80年代の末から東欧の「産業革命」が始まった。これは外国資本の輸入と国家の工業化政策によって推進された。そして、東欧経済は世紀の変り目以降「独占資本」の出現を見、「産業革命」は独占資本主義の形で資本制生産への「過渡期」を終えようとするが、未完のまま第一次世界大戦へと入っていった。<sup>101)</sup>

ここでは、我々は、「農業革命」と「産業革命」によって封建制から資本制への「過渡期」が終結されて自由な「産業資本主義」段階の成立を見、やがてそのもとでの生産の集積を通じて「独占資本主義」段階へと移行した西欧先進資本主義諸国の発展パターンが、東欧については機械的には適用されていないことに気がつく。他の東欧諸国の経済史学はほとんど上の発展パターンを各国の経済発展にあてはめている<sup>102)</sup>のに対し、ハンガリー史学はこれを一国史的ではなく全ヨーロッパ的發展の見地から再検討し、西欧の発達した資本主義に適応しなければならなかった東欧の特殊性を強調しているのである。

##### a. 農業における資本主義

先進資本主義的西欧の支配する世界経済に適応しつつ発展せねばならなかった東欧の適応形態は、資本主義発展の諸段階の特殊性だけでなく、「農業革命」の内容にもあらわれていた。それは、農業の資本主義の「プロシア的」発展の道であった。農奴解放後の東欧の地主的土地所有および農民的土地所有の資本主義化の過程は、ニーダーハウザーの研究によって明らかにされている。彼によれば、プロシア、ロシア、オーストリア＝ハンガリー二重王国、ルーマニア、そしてある程度まではボスニア＝ヘルツェゴヴィナでは、農業の資本主義的発展は「プロシア的」発展の道をたどった。しかし、この中の多くの地域においては、農奴解放後も広く残存した地主経営は直ちには賃労働雇用へは移行せず、資本主義的

100) U. o., 467-468 l.,

101) Berend T. I. -Ránki Gy., *Közép-Kelet-Európa gazdasági fejlődése...*, 19-188 l.

102) とくに、ソヴェトの文献は忠実にこのパターンを守っている。これは、ロシア帝国主義史にかんする национализация 派と денационализация 派の論争にまでさかのぼる問題である。

経営への「過渡的形態」をとった——さまざまな形の雇役制度 (отрабoтка, ledolgozás) や分益小作 (métayage, részesbelet)——。言うまでもなくこの原因は、レーニンの分析にならって、資本主義生産のための条件の不足や封建遺制の残存に求められるとともに、工業発展力の弱さによる農民の都市吸収力の弱さにも求められている。やがて、商品経済の発展、農民層分解の進展は、地主的土地所有の資本主義的経営(「ユンカー的」経営)への移行を必然化し、機械が導入され、賃労働 (bérmunka) が雇用され始めた。他方、農奴解放後に成立した農民的土地所有は、地主的土地所有の広汎な残存のために、自由な発展を妨げられた。しかし、農民層分解はしだいに進行して、雇役制度の基盤である中・貧農をくずし、農業プロレタリアートを析出する一方、富農経営を成長させ、東欧のいくらかの地域で「アメリカ的」発展の道を実現させた(例えば、ハンガリー中央部など)。しかし全体として、狭義の東欧の農業は「プロシヤ的」発展の道が支配し、また20世紀初めにおいても、封建的色彩がまだ強く残っていた。

他方、バルカンにおいては、ニーダーハウザーによれば、土地改革後の小農民的土地所有は自由な資本主義的発展の道を保証したはずであるが、耕作地の絶対的狭隘性がそれを妨げた。改革後すぐに農民経営は現存の農業技術のもとでの耕作可能性の限界に達し、他の東欧諸国の農民経営と同じく土地不足に直面し、農業の資本主義的発展は進まなかった。<sup>103)</sup>

同じく農奴解放後の農業の資本主義化の問題に関連して、アラトーは、まず狭義の東欧の農奴解放後の農民の状態を次のように区分した。①土地無し農民や小土地所有農民が改革後に賃労働者として地主経営に労働力を供給したプロシヤとロシア領ポーランド、②農奴解放後それら貧農が過渡的形態としての雇役や分益小作として地主経営に従属し、賃労働への移行に時間のかかったハプスブルク帝国内諸国、③土地に縛りつけられた農民が同時に過渡的形態に依存して生存を維持せねばならなかったロシアとルーマニア。他方、彼によれば、バルカンの農業発展は、土地所有の点では「アメリカ的」発展の道の方向にあったが、経営の点では著しい資本不足のためにむしろ「プロシヤ的」発展の道にあった。したがって、バルカンの農業発展は「アメリカ的」発展の道と「プロシヤ的」発展の道の混合 (keveredik) したものであった。<sup>104)</sup>

19世紀後半のロシアとハンガリーの「プロシヤ的」農業発展を比較したパホ・Zs・パールの先駆的研究は、二カ国のみと比較という限界はあるが、理論的には最もしっかりしたこの時期の農業の研究である。彼の結論は、ハンガリーの農奴解放後の条件はロシアのそれより農業の資本主義的発展にとって有利であり、19世紀末までにはハンガリーの大地主は雇役から賃労働への移行を基本的に終えていたのに対し、ロシアではまだ前資本主義的搾取への依存が広く残っていたとしていた。<sup>105)</sup> これは、プロシヤからハンガリーを経てロシアにいたる「プロシヤ的」発展の道の進展度(逆に言えば封建制の残存度)の傾斜を示唆しており、その後のハンガリーでの研究に吸収されていると言えよう。

103) Niederhauser E., A nagybirtok és parasztság Kelet-Európában: A parasztság Európán: The Problems of Bourgeois Transformation を見よ。

104) Arató E., *Kelet-Európa története...*, 464-468 l.

他方、ベレンド＝ラーンキの研究は、東欧農業の資本主義化の問題に、別の角度から接近した。彼らによれば、東欧では農奴制の廃止ののちにやがて始まった農業の資本主義化は、資本制生産への「過渡期」の「農業革命」であり、「産業革命」と共に、資本主義を体制的に成立させる要素であった。だがこの農業革命は世界市場における東欧の分業上の位置に規定されて展開された。すなわち、19世紀後半の東欧は産業革命を完了した西欧の工業品市場・農産物供給基地としてますます強く組織されつつあり、それが東欧の農産物需要を著しく拡大しつつあった。これに対して、狭義の東欧の前資本主義的搾取に基づく地主経営や資本に不足する農民経営は十分に生産力を高めることができなかった。ここに農業の資本主義化が不可避的となったのである。農業の資本主義化にとっての困難は、賃労働の供給よりも、むしろ農具や機械を導入する貨幣資本の不足であったが、これは、銀行による抵当信用の拡大、鉄道建設が実現した市場拡大による農産物価格の上昇、そして外国資本の輸入によって満たされた。他方、バルカンでは、土地の狭隘性と資本不足が農業の資本主義化の障害であった。しかし、自由な農民的土地所有は資本主義世界市場により密接に結びつけられえたのであり、やがて外国資本に後援されて設立された銀行や鉄道網がその結合を実現した。この条件下でようやくバルカンの農業の資本主義化が開始を見たのである。このように東欧における「農業革命」は世界市場との有機的関係のもとに、19世紀最後の二・三十年以降進展したとされたのである。

こうして始まった「農業革命」は、鉄道建設や信用制度の発展とともに、やがて「産業革命」を必然化しその諸条件を準備した。そして「産業革命」はまた、その進行につれて「農業革命」をさらに促進することとなった。<sup>106)</sup>

#### b. 未完の産業革命

東欧の産業革命の研究は、一国史的には各国で相当に深められている<sup>107)</sup>が、東欧全体を対象としたものはまだ十分ではない。この問題についての最初の実質的内容を持った研究は、ハンガリーにおいてハンガリーおよび二重王国下の産業革命にかんする論争を経て1960年代末に著わされた。それ以前には、東欧の産業革命は50年代後半に方法論的視点から論じられたただけであった。

簡単に50年代の議論を要約しておこう。既に述べたように、この議論はイギリスの古

105) Lásd., Pach Zs. P., Az oroszországi és magyarországi poroszutas agrárfejlődés... とくにロシア語版がくわしい。

106) Berend T. I. -Ránki Gy., *Közép-Kelet-Európa gazdasági fejlődése...*, 43-74 l.

107) この面でもっとも研究が進んでいるのはソヴェトである。主なものは、С. Г. Струмилин, «Промышленный переворот в России», Москва, 1944; М. Ф. Злотников, От мануфактуры к фабрике, «Вопросы Истории», 1946, № 11-12; В. К. Яцунский, Промышленный переворот в России, «Вопросы Истории», 1952, № 12; В. К. Яцунский, Крупная промышленность России в 1790-1860 гг., в «Очерки экономической истории России первой половины XIX века», Москва, 1959; Б. Л. Цыпин «Некоторые особенности промышленного переворота в России», Свердловск, 1968; П. Г. Рындзюнский, Вопросы истории русской промышленности в XIX в., «История СССР», 1972, № 5. 東独では, H. Mottek, *Studien zur Geschichte der industriellen Revolution in Deutschland*, Berlin, 1960, チェコでは J. Purš, *The Industrial Revolution in the Czech Lands* など, ハンガリーでは, Sándor V. のほかに Mérei Gy., *Magyar iparfejlődés 1790-1848*, Lederer E., *Az ipari kapitalizmus kezdetei Magyarországon*, Bp., 1952 があった。

典的産業革命と東欧における「プロシア型」産業革命を対比した1956年のJ・クチンスキー論文<sup>108)</sup>に端を発し、同年のJ・プルシュ<sup>109)</sup>やW・クラ<sup>110)</sup>の批判によって、また、二年後のB・K・ヤツンスキー論文<sup>111)</sup>によって発展させられたものであった。一連の議論の主たる論点は次の諸点であった。

(a) クチンスキーが、イギリスの産業革命の主導部門であった繊維(綿)工業を基準に東欧の産業革命を分析したのに対し、批判者たちは他の軽工業部門ならびに重工業部門をも分析する必要を説き、とくに東欧では食料品工業が産業革命において重要な役割を演じたと述べた。

(b) クチンスキーによれば、一定の国民経済の産業革命は繊維工業において機械制大工業が家内手工業とマニユファクチャーを駆逐し、生産力の新たな発展に応じた新たな資本主義生産関係を成立させたときに終了したと見なされるが、プルシュやクラによれば、産業革命は特定の工業部門においてではなく工業生産全体において機械制生産が手工業制生産を凌駕したとき、あるいは、機械による機械の生産が実現されたときに終了したと見なされるべきであった(ヤツンスキーは国民経済の基幹工業において機械制生産が支配的となったときとした)。

(c) クチンスキーによれば、「プロシア型」産業革命は「帝国主義時代の産業革命」として展開され、ドイツでは19世紀いっぱい続き、ロシアでは1917年までには完了せず、ブルガリア、ルーマニア(ハンガリーも)ではさらに遅れていた。これに対し、他の史家によれば、産業革命は、ドイツでは1870年代、ロシアでは80~90年代、ハプスブルク帝国では平均して80年代(ボヘミア、モラヴィア、シレジア、下オーストリア、シュチリアでは60年代末から70年代初め、ハンガリーでは90年代)に完了した。

さらに、産業革命を工業内部の問題と考え、東欧のその特殊性を西欧に対する時期的遅れと既成技術の導入の可能性にのみ見出しがちなクチンスキーやプルシュに比べて、クラとヤツンスキーは封建的地主経済の産業革命への影響とその逆の影響とをより慎重に考慮した。ヤツンスキーの言を借りるならば、

(d) 東欧の産業革命は封建的諸関係がまだ残っているところで発生し、資本の本源的蓄積は限られていた。これゆえに、東欧の産業革命は西欧に比べ著しく緩慢であった。

(e) イギリスの産業革命は工業だけではなく国の全社会・経済構造の変革をもたらしたが、東欧ではこの側面は封建的農業における原始的自然経済の支配により限定されていた。

さらに、クラは、東欧の産業革命の特殊性として、鉄道のような近代的技術の早期導入、小生産の広汎な残存、国家の重要な役割などを指摘した。

しかしながら、以上の議論はイギリスの産業革命のモデルをその根底に据え、イギリス・モデルのいかなる要素が東欧ではゆがめられたり遅れたりしたかという角度から東欧の

108) Siehe., J. Kuczynski, Zum Problem der industriellen Revolution.

109) Cf., J. Purš, Problems of the Industrial Revolution.

110) Cf., W. Kula, Some Observations of the Industrial Revolution in Eastern European Countries.

111) См., В. К. Яцунский, К вопросу о проблематике и методике изучения истории промышленного переворота.

産業革命の特殊性を論じていた。とくに、産業資本主義から独占資本主義への成長転化というモデルについても、それが東欧に基本的に適用されるべきことが前提とされていた（この点、クチンスキーは異なっていた）。

1960年代末に現われたハンガリーの東欧産業革命研究は、資本主義発展の古典的モデルに固執せず、「再版農奴制」がそうであったように、東欧の資本主義発展が西欧の先進資本主義に適応しつつ西欧とは質的に違った道を歩んだことを示そうとした。この問題を最も深く分析しているベレンド＝ラーンキの一連の研究<sup>112)</sup>の結論を整理して見よう。

(1) 「産業革命」の概念は広く解されねばならない。それは「農業革命」と共に封建制から資本制への移行を完了させる重要な要素である。したがって、それは工業への機械の導入に限られる概念ではなく、農業をも含む全経済構造の、工業の機械化による、根底的（「過渡期」を完了させる）変革と考えられなければならない。

従来の大部分の歴史学は産業革命を工業への機械の導入と考え機械による機械の生産を産業革命の完了の指標と見ていた（例えば、C・G・ストゥルーミリンやJ・プルシュ）。工業的に発達した国においては、工業への機械の導入自体が全社会・経済構造に革命的な変化をもたらし、資本主義を国民経済体制として確立させえた。したがって、このような産業革命の定義はハプスブルク帝国の西部諸国においては有効でありえた。しかし、大部分の東欧諸国においては、工業は多少とも封建的な農業の大海の中の小島でしかなかったから、単なる工業の機械化は資本主義の体制的確立の観点からすればほとんど意味を持ちえなかった。ヤツンスキーはこの問題に気づいていたが、彼もストゥルーミリンと同じ産業革命概念を持っていたために、東欧の産業革命の経済全体への影響は限られていたとして満足していたようである。確かにそのような割り切り方は可能であった。しかしそうして確立された資本主義は底辺の狭いものであり、それをもって、資本主義の体制的確立を言うには無理があった。（まして、そのような資本主義から独占資本主義の成熟を言うことはむづかしかった）。この点は、ソヴェトでの新しい研究は反省を加えているようであり、産業革命を農業の変革とより密接に結びつけて研究する必要をうたっている。<sup>113)</sup>

ベレンド＝ラーンキはこの反省をさらにつきつめ、もう一方の論理的帰結に導いた。彼らによれば、資本主義を体制的に確立させるような工業の変革を「産業革命」と呼ぶべきなのであり、それが上述の定義なのであった。それは国の経済のすべての部門を自らとの有機的關係に置くような工業のダイナミックな発展であり、その結果として新たな生産力と生産関係の対応をもたらすような工業発展であった。前者の意味では、それはW・W・ロストウの「離陸」の概念に通じ、後者の意味では、それはクチンスキーの産業革命概念に通じていた。

112) Berend T. I. -Ránki Gy., Az ipari forradalom kérdéséhez...: *Közép-Kelet-Európa gazdasági fejlődése...* このほかに, Katus L., A kelet-európai iparosodás...: Az ipari forradalom Kelet-Európában (東欧の産業革命), "Élet és Tudomány," 1967, 48 sz. も有用。

113) См. П. Г. Рындзюнский, указ. статья. 同論文は、ロシアでは1861年改革前に産業革命が終ったとしたストゥルーミリンや、それを少し手直しして1880年代に完了したとしたヤツンスキーを批判して、80年代にはじめて産業革命が革命的形態をとって進行したとした。又、国際的見地からの研究の必要をもうたっている。

(2) 東欧においては、農奴解放ののちにまず農業の資本主義化（「農業革命」）が生じ、産業革命はその一定の前進とそれのための鉄道網・信用制度の一定の発展を前提としてのみ出発しえた。農奴解放ののちも長いあいだ、国内資本も輸入資本も農業に向けられ、工業は資本不足に悩まされた。

農業・鉄道・信用の一定の発展ののちに初めて工業は前進が可能となった。こうして、東欧では、イギリス・フランスなどちがって、産業革命は、農業発展を待って単に遅く始まっただけでなく、鉄道や信用の発展ののちに始まりえた。農業関係の需要だけでなく鉄道需要もが産業革命を始動させ、信用機関が国内蓄積や外国資本の工業投資を媒介したのである。

(3) 具体的には、東欧では産業革命は三つのコースをたどった。オーストリアとチェコでは産業革命は1848年に始まり1870年代に終了した。ハンガリー＝ポーランド＝ロシア型産業革命は80年代の末に始まったが第一次世界大戦前には終了しなかった。バルカンのそれは90年代に始まったが、十分に展開されないままに大戦に入った。

オーストリアやチェコでは産業革命は1873年恐慌までに終了しており、従って、恐慌の影響は深刻であった。ハンガリー、ポーランド、ロシアでは60年代以来産業革命の準備期間が続いていただけであるから、73年恐慌の影響は大きくはなかった。ロシアやポーランドでは西欧に「農業恐慌」をもたらした穀物輸出の波に乗って80年代末に産業革命が始まった。ハンガリーでは逆に「農業恐慌」が生じていた<sup>114)</sup>が、オーストリアとの経済関係の作用のもとに、73年恐慌のいくつかの影響が克服されるにつれ、同じく80年代末に産業革命が始まった。農業革命が国内市場を拡大しつつあったこれら諸国に比べて、国内市場の形成の遅れていたバルカンでは産業革命はより遅く始まっただけでなく進展も緩慢であった。ここでは産業革命は西欧列強のバルカンへの関心の高まりののちによりやく開始されえた。

(4) 大部分の東欧諸国においては、食料品工業が産業革命の準備期と開始期を主導した。これは東欧の産業革命の社会・経済的影響力を西欧に比べて著しく弱くする要素であった。

この問題はハンガリーその他東欧諸国の歴史学において長年の論議の的となってきたものである。ペレンド＝ラーンキは東欧の産業革命における食料品工業の重要性を認めたが、しかしそれを産業革命の初期についてのみ認めたのであった。産業革命が大衆的な消費財を生産する工業部門から始まったことが重要であった。しかし、繊維工業と食料品工業の経済的波及力の違いは否定しえなかった。

(5) 大部分の東欧諸国においては、産業革命の主要過程は世界経済の独占資本主義時代に鉄鋼業を基幹部門として展開された。この過程は外国資本に支えられた国家の「工業化」政策によって促進された。そして、世紀の変わり目以後、東欧自体にも独占資本主義の形態が現われ、そのもとで産業革命は完了に向かった。

産業革命は、鉄道建設に鼓舞された重工業（鉄鋼業）の機械化・新建設を基盤に、90年代

114) ハンガリーにおける農業恐慌については、Sándor Pál, *A XIX. század végi agrárválság Magyarországon* (19世紀末のハンガリーにおける農業恐慌), Bp., 1958.

から本格的展開を見た。しかし、これは、西欧諸国においてすでに独占資本主義が形成されつつある時に生じたものであり、独占的西欧の存在から直接・間接の影響を受けざるをえなかった。

第一に、1873年恐慌以後東欧から引き上げられていた外国資本が、80年代以後再び東欧に輸出され始め、今や工業に投下された。独占資本主義の特徴であるこの外国資本がとくに産業革命の出発段階で国内蓄積の不足を補った。従来のハンガリー史学は外国資本の輸入を植民地化ないしは従属化の要素として否定的に評価していたが、新しい史学は、資本輸入の積極的側面を強調しているのである。

第二に、東欧の産業革命は世界経済の自由主義時代に経済自動的過程としては終了しなかったがゆえに、世界経済の独占資本主義時代に特徴的な国家の経済政策によって上から促進された。それは、国の「工業化」政策の形をとり、外国資本に支えられた鉄道建設や工業補助金供与を内容とした。しかし、ベレンド＝ラーンキによれば、この国家の役割の重要性は東欧の経済的後進性の結果（A・ゲルシェンクロン等のいうように）ではなくて時代の産物なのであったが、まだこの時期には国家の役割よりも資本輸入のほうが東欧の産業革命に決定的であった。<sup>115)</sup>

最後に、産業革命の過程において、東欧自体にも「独占」が現われ、産業革命は独占資本主義時代に最も大きな前進を示した。もちろん東欧経済自体は独占を生み出すほどには成熟はしていなかった。が、西欧との密接な経済関係（とくに資本関係）のもとに、世紀の変わり目以後独占が東欧自体にも植え付けられ、さらに金融資本さえ現われるに至った。<sup>116)</sup>そして、東欧の産業革命は1906年以後の「独占」的好況の中で最盛期を迎え、こうして、独占資本主義という形で封建制から資本制への「過渡期」を終了させようとするのであった。（ただし、東欧での独占資本主義の確立は两大戦間になる。）

このような見解が、生産と資本の集積の結果としての自由な資本主義から独占資本主義への移行を説く他の社会主義諸国のマルクス主義的シェーマと相違していることは、明らかであろう。ある意味では、ここでもベレンド＝ラーンキの見解は「帝国主義時代の産業革命」を論じたJ・クチンスキーの見解に通じるものがあった。そのような問題は別として、ハンガリー史学によってここに提起された問題は東欧における帝国主義（＝独占資本主義）の問題<sup>117)</sup>として真剣な議論に値いするものと思われる。

\* \* \*

以上見てきたように、ハンガリー史学は東欧経済史の多くの面で、注目に値いする貢献

115) この点で、国家が工業化の主体であったことが、後進的東欧（とくにロシア）の特徴であったとするA・ゲルシェンクロンは批判されている。

116) Berend T. I.-Szuhay M., *A tőkés gazdaság története Magyarországon...*, 122-123 l.: Hanák P.-Lackó M.-Ránki Gy., *Gazdaság, társadalom, társadalmi-politikai gondolkodás Magyarországon a kapitalizmus korában* (資本主義期ハンガリーの経済、社会、社会・政治思想) “Történelmi Szemle,” 1969, 3-4 sz., 296-298 l.

117) これに関連して、Ránki, Gy., *Lenin imperializmus-elmélete* (レーニンの帝国主義論), “Történelmi Szemle,” 1970, 2 sz. は、レーニンの帝国主義論が、当時のブルジョア経済学の成果をとり入れて、マルクスの理論を発展させたことを強調し、一方では、レーニンの理論の相対化、他方では、ブルジョア史学から教訓を学ぶ必要を示唆している。

をなしている。それは、「再版農奴制」の成立と展開をめぐる（あるいはその経済史的位  
づけをめぐる）国際的議論に貢献をした。それは、東欧の農奴解放と「ロシア的」発展  
の道の比較研究において独走状態にある。それは、資本主義の確立へ向けての発展期の東  
欧経済史については、いわば「コペルニクスの転回」を従来のマルクス主義東欧史学に迫  
りつつある。

最後の点については、（筆者の個人的関心のゆえであろう）ソヴェト史学とハンガリー  
史学の明確な対照がとくに眼につく。ソヴェト史学はいわば「産業資本主義」から「独占  
資本主義」への成長転化のシェーマをハンガリー史学とは対照的に忠実に守っているの  
である。これは、マルクス主義経済理論に対する態度の相違のほか、1917年の社会主義革  
命に成功したソ連の史学が社会主義革命の経済的合法則性を証明すべくロシア時代の資本  
主義的発展を法則にかなったものとして描こうとするのに対し、1918～19年の革命が社会  
主義革命としてではなく結局はブルジョア民主主義革命として終わった<sup>118)</sup>ハンガリーの史  
学が、その経済的基盤を資本主義発展の未成熟に求めようとしていることの現われである  
かも知れない。とすれば、我々はハンガリー史学に、1917年のロシア革命および1918～  
19年のハンガリー革命を生み出す前夜の東欧全体の、さらにヨーロッパ全体の社会・経済  
構造を「比較」と「国際関係」の視点から解明してくれることを望まないわけにはいかな  
いのである。

（1973年12月23日 ブダペシュト）

Problems of “East European” Economic History  
in Recent Hungarian Historiography  
— from Feudalism to Capitalism —

Shingo MINAMIZUKA

It is widely recognized that the “East European” studies have been more system-  
atically pursued and have been more highly developed in Hungary than in any other  
East European countries. This paper deals with the economic aspects of the Hun-  
garian historiography in the “East European” studies.

The first chapter is devoted to the chronological survey of the development of  
the studies of the “East European” economic history from feudalism up to the  
Second World War, which have been carried out in postwar Hungary. Attention is  
paid to the motives and the methodology of “East European” studies as well as to  
the definition of “Eastern Europe.” According to the author’s opinion, the Hungarian

118) 1918-1919年のハンガリー革命については、ここで詳述はできないが、今日のハンガリー史学では、  
1918年10月の革命はブルジョア民主主義革命、1919年3月の革命が失敗に帰した第一次プロレタ  
リア革命と規定され、両革命の関係が強調されるとともに、当時の諸条件下でプロレタリア革命の  
可能性を説いた主観主義が批判されている。

historiography in this field had a budding period in the first half of the 50s, which was followed after the criticism of “the cult of personality” in 1956 by the first stage of development. The first stage was characterized by the comparative study of the agrarian history of “Eastern Europe” — especially that of the “second serfdom” and the “emancipation of serfs” —. The second stage of the development of the “East European” studies in Hungary began at about 1967, being characterized by the comparative studies of the industrial, consequently modern, history of “Eastern Europe.” This was carried out hand in hand with the studies of the Austro-Hungarian Monarchy.

The following chapters summarize the achievements of Hungarian historians concerning each important period of the “East European” economic history from feudalism to capitalism (up to the First World War).

The Hungarian historiography has made a remarkable contribution to the international investigation of the establishment, the development and the nature of the “second serfdom” in “Eastern Europe proper” (that is, in that part of Europe which lay east of the Elbe over to the Urals, except the Balkans). Remarkable achievements of P. Zs. Pach are mainly dealt with concerning this problem.

As for the emancipation of serfs in “Eastern Europe” in the first half of the 19th century, there are unparalleled comparative studies by E. Niederhauser and E. Arató.

The economic history of “Eastern Europe” in the period of the advancement toward the establishment of capitalism is also comparatively investigated by the Hungarian historiography, especially by I. T. Berend and Gy. Ránki.

The general tendency of the Hungarian historiography may be found in the fact that it is emphasizing the peculiarities of the “East European” development, rejecting the mechanical adoption of the “West European” model of the economic development.